

【彙報】

安場経済学の意義とその背景

人見光太郎・澤田康幸・瀧井克也・阿部武司

1. ま え が き

安場保吉先生は、1953年東京大学教養学部卒業後、同大学大学院社会科学研究科を経て1961年2月米国ジョンズ・ホプキンス大学大学院にてPh.D.（経済学）を取得された。その後すぐ、大阪大学経済学部講師として着任、1962年同助教授に昇任された。1969年から1980年の間、京都大学東南アジア研究センター教授を勤められた後、大阪大学経済学部教授として再度着任され、経済政策、経済発展の講義および演習を担当されていたが、1994年3月に大阪大学を定年退官されて本学名誉教授となられ、退官後は大阪学院大学経済学部教授に就任された。2005年4月13日（水）午後3時45分、安場先生は病氣療養中のところ逝去された。

安場先生のご研究は経済発展の理論的・実証的・比較経済史的研究に関わる、きわめて幅の広いものである。たとえば、アメリカにおける出生率の研究や米国奴隷制の研究はアメリカ経済史に大きな影響を残した。また、わが国で数量経済史（Quantitative Economic History）と呼ばれる分野における、戦前日本の生産指数や統計の信憑性の検討、日本経済の二重構造に関する考察、海上輸送と工業化についての研究等は学界の財産となっている。安場先生は1970年代からアジア諸国の経済発展にも関心を持たれ、この分野でもパイオニアとなられた。その上で、安場先生はその著書『東南アジアの経済発展：経済学者の証言』（ミネルヴァ書房、2002年11月刊）において、ご自分の立場を「新古典派ラディカル政治経済学」とまとめられた。

しかしながら、その幅広い業績ゆえ、この安場経済学の体系はあまり深く理解されないまま今日に至っている。本稿は2005年7月29日に大阪の千里クラブにおいて行なわれた「安場保吉先生を偲ぶ会」の内容を記録として残すことで、その安場経済学の全貌を理解する一助とすることを目的とするものである。

「偲ぶ会」は宮本又郎、高阪章、人見光太郎、澤田康幸、瀧井克也の5名の発起人の呼びかけの下、数量経済史（QEH）研究会、19世紀の会、紡績企業史研究会、経済発展論研究会、安場門下生、大阪学院大学、大阪大学等における安場先生と関連の深かった35名と安場先生のご遺族3名の参加を得て行なわれた。

「偲ぶ会」は第1部：「安場先生の学問的貢献について」と第2部：「安場先生の思い出」によって構成された。第1部においては、「数量経済史と安場先生」というテーマで法政大学経済学部の尾高煌之助先生から、「アジアの経済発展論と安場先生」というテーマで東京大学東洋文化研究所（当時）の原洋之介先生からご報告をいただいた。両先生は、「新古典派ラディカル政治経済学」を自称される安場経済学の輪郭をわかりやすく説明してくださった。第2部は、清川雪彦、篠原三代平両先生からいただいたメッセージが紹介された後、中村隆英、江崎光男、山本有造、内海洋一、榊原胖夫、岡崎哲二、市村真一の諸先生が、それぞれ個人的な思い出を語られた。それらのお話から、安場先生が生涯を通じて研究に対して、真摯に批判的に取り組まれてきた姿が浮き彫りにされた。

安場先生はアメリカ経済史においても、非常に大きな影響力ある学問的業績をあげられてきているが、日本国内において、安場先生のアメリカ経済史をはじめとする海外での評価について語っていただけの方を探すことができなかった。そのため、海外からRichard A. Easterlin, Robert W. Fogel, Peter Mathias, R. Marvin McNinnis, Gustav Ranis, Nathan Rosenberg, Peter Temin, Jeffrey G. Williamson, Pan A. Yotopoulosの9名の教授からこの「偲ぶ会」にむけたメッセージを送っていただき、そのメッセージを参考資料として配布することで、海外における安場先生の貢献をうかがい知る一助とすることにした。

本稿は、「偲ぶ会」の内容をメッセージの執筆者や発言者の許可を得て文章化した。文章化に際しては、録音テープを文章にした後、メッセージの執筆者や発言者ご本人に加筆修正を加えていただくという形式によりまとめていった。特に、基調講演をお願いした尾高、原の両先生には講演の内容を再編成していただくという労をとっていただいた。「偲ぶ会」の雰囲気そのまま伝えられるよう心がけたが、読みやすさを考慮し、編集上の修正を加えた箇所もある。また、海外からのメッセージの一部を当日は日本語に翻訳して紹介したが、重複を避けるため、その部分を割愛し、送られてきたメッセージを英文のまま掲載することとした。

「偲ぶ会」当日には業績一覧も資料として配布したが、内容は安場保吉博士還暦記念論文集である『大阪大学経済学』第41巻第2・3号(1991年12月)に収録されているそれと重複するところも多いため、今回は掲載せず、<http://www2.osipp.osaka-u.ac.jp/~takii/yasuba.html> からダウンロードできるようにした。その一方で、安場先生の葬儀に際し市村真一先生と Professor Richard Smethurst からいただいた弔辞を、安場先生のご経歴とお人柄を理解するため関連資料として掲載することとした。

最後に、「偲ぶ会」の開催にあたっては、京都産業大学経済学部の飯田善郎先生、大阪大学大学院経済学研究科の鳩澤歩、中林真幸の両先生、大阪大学大学院国際公共政策研究科の研究支援室の皆様が当日の運営や資料作り等にご協力をいただいた。大阪大学大学院経済学研究科大学院生の菅原見樹さんには「偲ぶ会」開催のため、同研究科大学院生の北村紘さん及び秘書の北川陽子さんには本稿作成のために補助業務を行なっていただいた。何よりも、ご遺族の安場幸子様には、資料収集等、様々な方面でご協力をいただいた。この紙面をかりて感謝の言葉に代えることをお許しいただきたい。

2. 「安場保吉先生を偲ぶ会」の記録

2.1 開会の辞

人見 前半と後半に分け、前半は安場先生がなされてきた学問的な業績のお話を原先生と尾高先生にしていたで、後半はご歓談を挟みながら、皆さんに安場先生の思い出についてしゃべっていただくという予定をしておりますので、よろしくをお願いします。

それでは、まず発起人の1人であります大阪大学大学院国際公共政策研究科の高阪章先生から開会の言葉をいただきますと思います。

高阪 皆さん、今日はお暑い中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。発起人の代表といたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

後で思い出の話をする時間もあるそうでありますけれども、きっと皆様、思い出話が尽きないと思いますので、私の出番を減らすために、ちょっと思い出話もさせていただきながら、ご挨拶をさせていただきたいと思っております。

私は安場先生といろんなところでご縁がありました。一番最初に私が給料をもらって仕事をした場所はアジア経済研究所ですけれども、京都大学の院生であった時代にアジア経済研究所で研究員募集をしているというお話を安場先生のほうから、私の指導教員であります森口親司先生のところに話を持ってこられまして、誰か適当な学生はいないかということで、最初、私は候補ではなかったのですけれども、最初の候補がその話を断りまして、「君、どうですか」という話になりました。私、ちょうどそのころ職に就かないといけない理由がありましたので、お願いしますということで、安場先生が京大の東南アジア研究センターにいらしたところですが、川のそばの古い木造の、ギシギシと床の鳴る建物がありましたけれども、その研究室にお伺いしまして、初めてお会いしました。後から考えると、あれは面接であったのかなと思いますけれども、それが最初の出会いであります。

1974年にお会いして、それから私は13年ばかりアジア経済研究所におりまして、1988年に縁あって東南アジア研究センター、最初にお会いしたところに戻りました。先生はもういらっしやなかったのでありますけれども、

今、APEC というのがございます。アジア太平洋経済協力のための政府組織であります、それよりもう1つ

前からの組織、PECCというのがあります。太平洋経済協力会議といいますけれども、それが発足したばかりで、関西の財界がそれをかなりバックアップしておりましたので、先ほどもお話ししました森口親司先生と、それから安場先生がそれぞれ日本側の一種の代表委員として、そのリサーチ活動のリーダーとして仕事を始められました。ちょうど私が京大に戻ってきましたので、君も来いということで、安場チームではなく、森口チームのほうだったんですけれども、そこでまたお会いするということになりました。

京都では、今日お見えになってますけれども、市村真一先生、それから安場先生が京大の東南研の時代に経済発展研究会というインターカレッジエートの研究会を組織しておられて、私も京大に戻ってきたときに、そこでご一緒することになりました。市村先生は京大の東南研を私と入れ違いでお辞めになりましたし、安場先生はもうすでに大阪大学のほうに行っておられたわけですが、京都でその研究会はずっと続けておりました、安場先生が当時は事実上のリーダーとして、その研究会を引っ張っていらっしゃったわけです。その間、私はずっと安場先生と研究会をやっておりました。

先ほど申し上げました太平洋経済協力の調査研究をずっとやっておりましたときに、安場先生のチームを安場先生から私にバトンタッチするということが92年にありまして、その2年後に安場先生は阪大を定年退官なさいまして、大阪学院大学に移られました。

ちょっと年代をよく覚えてないのですけれども、大阪学院大学にいらっしゃる前後でしたでしょうか。私、今、長岡京市に住んでおりますけれども、「君のマンションに住むことになったよ」と言われまして（笑）。私は1003号室でしたが、安場先生は904号室にお住みになりまして、経済発展研究会は毎月ありますけれども、その研究会のたびに一緒に阪急電車に乗って帰るということになりました。その間にずいぶんお話を伺う機会があったと思います。

非常に印象に残っていることは、安場先生という方はスモールトークをなさらないんですね。ずっと学問の話、あるいは誰がどこで何したという学者の話で、本当に世間話をなさらないというのにびっくりしたんですけれども。常に研究のこと、あるいは研究者のこと、結構人事のこともご関心があったみたいですが、そういう話をなさっていました。私自身は経済開発とか、それから国際マクロをやっておりますので、先生と必ずしも重ならない部分もあったわけでありまして、そういうわけで先生の業績をしみじみ見ましたのは、今回、この会議をするときであって、同じ研究会をやっていた者としてはいささか不勉強であったなと思います。

非常に勉強家の方で、大阪学院大学へ移られてからは、非常に活発に著名なクリオメトリックスの先生方を大学の方に客員でお呼びになっておられまして、そういう意味で最初から最後までと申しますか、私の知っている限り、最初から最後まで研究に勤んでおられたという方であったなと思います。

まさかこんなに早くお亡くなりになるとは思いませんでしたので、私としても、隣人でありながらずいぶん不義理をしてしまったと、心残りはありますけれども、こうやって皆さん、今日お集まりいただきまして、先生を偲ぶ会、決して多くないお弟子さんたちでありますけれども、それぞれみんな研究者として自立している。そういう人材育成をされたのも、安場先生がそれほど熱心に人材育成されたとは私は思いませんけれども、そういう人たちが周りに集まってきて、先生を見ながら自分を修練して学者を形成していったのだと思います。これはやはり外部効果かなと思っております。

今日は皆さんとこうやって、安場先生と何かと関わりがあった方々がお集まりになって、これから、先生の学問のこと、お人柄のことをお伺いできれば、非常に貴重な機会でありますし、先生も喜んでおられるのではないのかなと思います。

簡単ではございますけれども、私の挨拶に代えさせていただきます、これからの皆さんのお話を楽しみにしております。どうもありがとうございます（拍手）。

人見 高阪先生、ありがとうございます。

それでは、これから第1部としまして、安場先生の学問的功績について、尾高先生と原先生に説明していただいて、その討論を行うという形にしていきたいと思っております。

ここで、第1部の司会を東京大学の澤田さんに司会を代わらせてもらいます。

2.2 第1部：安場先生の学問的貢献について

澤田 東京大学の澤田と申します。私、安場先生には1990年から92年まで大阪大学で経済学の修士論文を非常に親身にご指導いただきました。早速ではございますけれども、第1部の安場先生の学問的業績についてのセッションを始めさせていただきます。人見先生からご説明がありましたけれども、お二人の先生にご報告いただきます。最初は、「数量経済史と安場先生」という題で、法政大学経済学部の尾高煌之助先生からご報告いただきます。そして次に、「アジアの経済発展論と安場先生」という題で東京大学東洋文化研究所の原洋之介先生にお話いただきます。

2.2.1 「数量経済史と安場先生」……………法政大学経済学部 尾高煌之助
29vii2005

於、大阪千里クラブ

歴史を遡る比較経済発展論

——故・安場保吉教授の経済学を偲ぶ——

1. 社会科学的千里眼

安場経済学の特徴のひとつは、比較経済発展論の視座である。安場さんは、早い時期から東アジア¹に関心を寄せ²、地域の成長可能性を正しく見抜いておられた。2002年に上梓された著書『東南アジアの経済発展』(2002)には、その予想がほぼ的中したことが誇らしげに報告されている。

しかしこの事実は、安場さんにとって単に予測的中したというだけにとどまらぬ意味があった。なぜなら、これは「新古典派ラディカル」を自認する安場さんにとって、ご自分のよってたつ研究方法の適切さを確認するものでもあったからである。ちなみに、ここで安場さんが新古典派ラディカルと呼ぶ方法とは、「…民間資本形成、技術進歩、経営上の進歩、そして特に人的資本や社会資本の改善など供給側の諸条件を重視する理論」(2002:47)を中核とする、標準的な現代経済学の道具箱である³。ただし、政府の役割も認めるので、その点がいささか「ラディカル」なだけである⁴。

経済発展は⁵、社会資本、法体系、民主的政治組織などの制度的な基本骨格さえ整えば、あとは企業家精神と市場の活動とに任せても自然と展開する。ただしその歩みは、ただ放任すればよいのではない。利得競争は弊害も生む。貧困や不平等も生ずる場合があるし、環境汚染も発生するのだから、政治の約束にもとづいて弊害を除去する意識的な努力も必要である。安場さんが所得分布に強い関心を示されたのはこのためである。このような条件つきではあるが、総じて安場さんの方法論は、正統的な現代経済学のそれであった⁶。

2. 初期条件を考える

所得分配との関連でいえば、東アジアの経済発展を観察した安場さんは、工業化の初期段階では、一人当たり GDP

¹ 以下では、最近の慣行に倣い、東アジアと東南アジアとをまとめて東アジアと呼ぶ。

² 京大東南アジア研究センターに奉職されていたためでもあったろう。

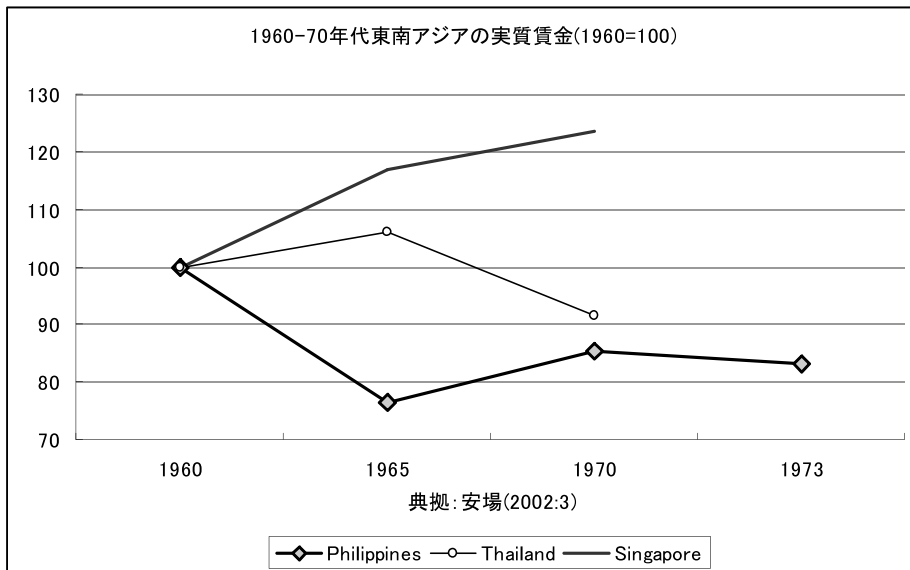
³ かつて安場さんが、若い経済史家に対して道具箱としての経済理論を携帯する大切さを説いておられるのを傍聴したことがある。そのとき安場さんは、「簡単な新古典派の経済学をマスターしておくだけでいい。だがそれは経済史家にとって大切な心得だ」という趣旨のことを述べられた。

⁴ あまり目立たないが、環境や福祉（そして所得分配）への言及も多い。たとえば「高度成長と高齢者」（1978）は、高度成長準備期の政府貯蓄は、（とりわけ貧困高齢層の）福祉支出を犠牲にして増大し、代わりに産業関連の政府・民間資本形成を増進して、戦後成長を始動させたと主張している。

⁵ 安場さんは、同じ economic development でも、利益先行の響きをもつ「経済開発」の語句を嫌われ、「経済発展」を好まれた（2002: vii）。

⁶ 「正統派」であるがゆえに、その根幹を疑う発言に対しては鋭敏に反応された。古くはマルクス経済史学（「講座派」と「労農派」の双方）に対する批判的考察があり（1968）、少し降っては、労働の無制限的供給を唱える「古典派的」発展論へのクリティックがあり（1980: 154-163）、また最近では、「新制度学派」や「比較制度分析」に対する辛口のコメントがあった（2001）。

図1



は着実に伸びているのに実質賃金は下降するケースがあることに注目している（→図1）。この観察がなされた同地域・同時期のジニ係数は停滞か増大かを示しているので、どうやら所得は不平等化していた可能性もある（2002：3－9）。もしデータが正しいとするなら、この発見は、16－18世紀にかけて近世西欧で観察された一人当たり実質所得の増大と低減する実質賃金との共存という、経済史学界のホットな話題に対して一つのヒントを与えるかもしれない。

ちなみに安場さんは、東アジア経済が過度に輸入代替に走ることの危険を警告された。東アジアにとっては、それよりはむしろ資源賦存度をうまく生かした発展戦略——具体的には、労働集約的産業の育成とその製品輸出をバネとする発展⁷——がよいと考えられたからであった。

さて安場さんは、東アジアを中心とする比較経済発展分析の30年をくぐりぬけた後に（つまり、第1節で触れた書物のなかで）、改めて明治経済史を振り返る。そして、明治経済史は、20世紀後半の（日本を除く）東アジアが経験したことを、一世紀以上も前にはほぼ同じ手順を踏んでやり遂げたとの結論に到達する。

なぜある国では胎動が早く、他の国ではそれが遅かったのか。この問いは、経済発展の初期条件を問うことに他ならない。これは、いわば歴史を後ろ向きに遡る関心である。安場さんはこの関心から、徳川時代を点検する（1987）。経済面だけではなく、社会文化的要因（教育、消費パターンなど）の重要性が認識される。ここに、徳川期の生活水準をめぐる論争（1986）の火種もあった。

このように考えるとき、安場さんの東アジア経済史の認識過程は、戦前に始まる日本経済史の伝統とはまったくさかさまであることに気がつく。徳川期には、一般生活水準は低く（もちろん英国のレベルには及ばず）、技術革新のテンポも緩やかで、鉱工業の芽は僅かに見られるだけであった。けれども、一人当たり実質所得は僅かずつながら着実に増えていたし（その一つの証左は、米反収の上昇（→図2）である）、庶民に教育は施され（→図3）、新しい文物に対する好奇心は絶大で、消費文化も栄えていた（1987）。

近世以来、単系家族（stem family）システムが採用され、その方式は商家経営にも応用された結果イエ（企業）の継承が重視されたので、華僑とは違い、資産の蓄積や資金の再投資が活性化する素地があった。また、明治になってから政治のリーダーシップを握った西南の下級武士たちは、徳川時代の制度的規範から自由だったがゆえに、思う存分社会・政治的変革の鉈を振ることが出来た。

⁷ たとえば、1970年代後半のタイの経験（2002：第6章）など。

図 2

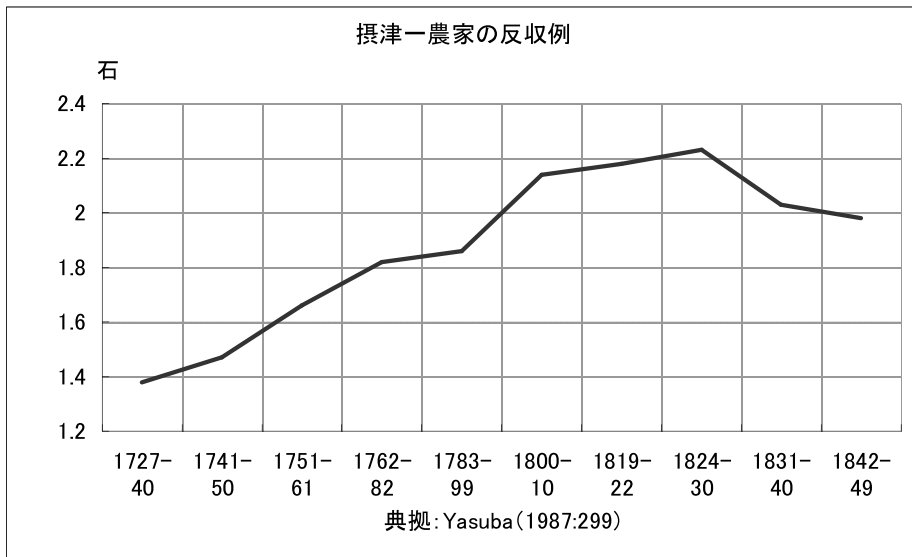
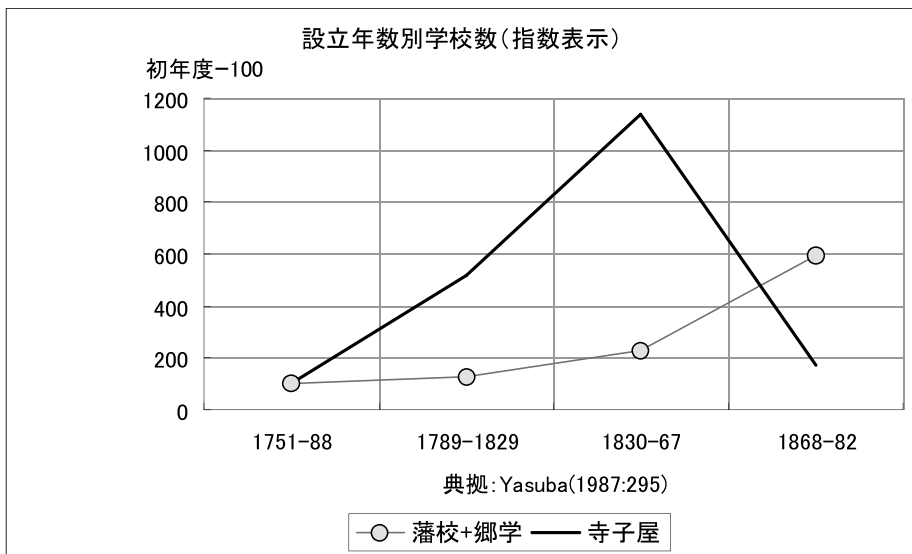


図 3



3. 明治期の高い評価

それならば明治期はどうか。

明治期の工業化は自由貿易体制下であり、在来部門を中心とする軽工業中心で、舶来の製造技術を大々的に導入したのは、主に綿紡績くらいのものであった(1965:557)。安場さんの関心の的が古くから明治初期-中期にあてられていたのは、おそらくこの点に注目したからであろう。工業生産指数の精度や工業生産構造の変化(『明治7年物産表』)が取り上げられたのも、この関心ゆえと思われる。

マクロ的には、明治日本は関税自主権を持たなかった。だから発展途上国がともすれば陥る幼稚産業過保護の愚を冒す余裕がなく、自由貿易主義にその活路を見出し、第一次産品の他には生糸などの軽工業製品を輸出して外貨を稼ぐほかはなかった(ibid.)。ところがその在来産業は、海外交易の試練に意外と頑健に耐えた。この点

図4

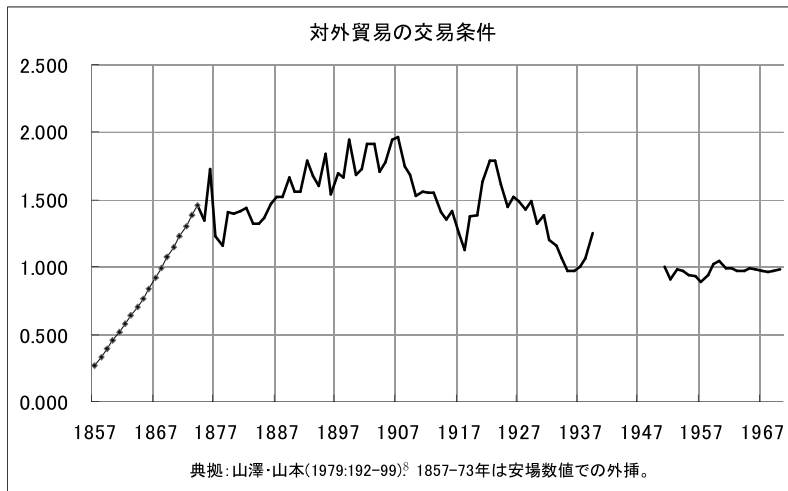


図5



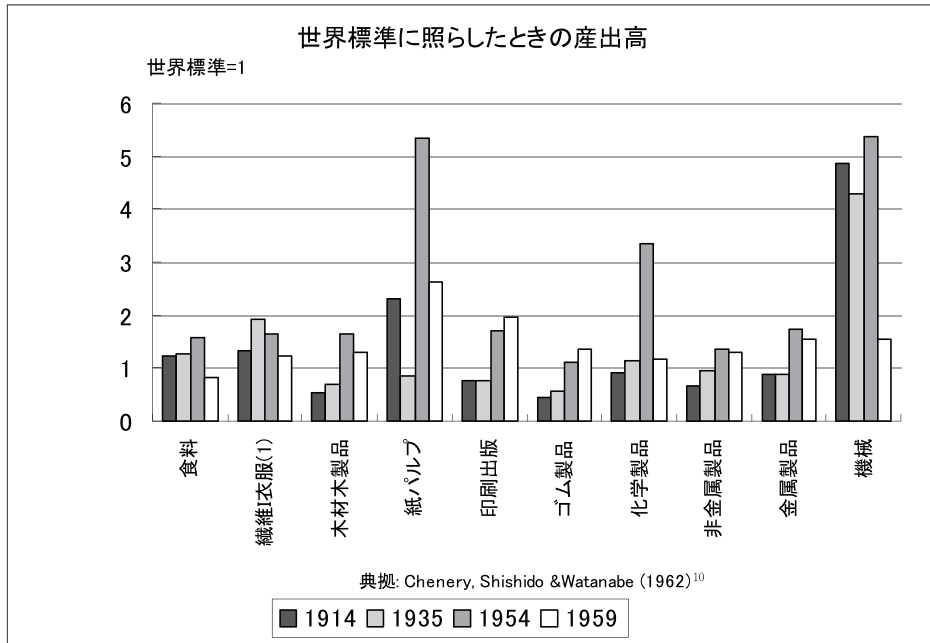
に鑑みると、(安場さんによれば) 明治期の対外交易条件 (terms of trade) が長期的に有利化したことの意味は高く評価されねばならない (1996:548) (→図4)⁹。明治期には、(国内物価に照らして) 比較的高価な商品が輸出されたのに対して、海外からの輸入品にはとりたてて高価な機械器具は少なかったのである。

なお安場さんは、経済運営における政府の役割をとりたてて重視しない。とりわけ明治期の政府財政支出は

⁸ 山澤逸平・山本有造『貿易と国際収支』長期経済統計14, 東洋経済新報社, 1979

⁹ 「交易条件が変化しても、『国内生産によって満たされる国内総需要』には影響は及ばないが、輸出の購買力、つまり同量の輸出で輸入できる財・サービスの実質額は交易条件の変化率と同じ率で増減し、したがって、国民総購買力もその分だけ影響をうける。」(1980:9)

図 6



GNPの8.4%にすぎず、たいしたことはなかった(1965: 551)。ただし、海運業に対する明治政府のテコ入れだけはとびぬけて強力で(1979)、その結果生じた海上運賃の低下(→図5)は、日本経済にかけがえのない貢献をした。

4. 大正から昭和初期へ：暗い谷間の時代？

ところが、日露戦役以後第二次世界大戦終結時点に至る日本は、まさに異常な軌道を走ったと言わざるを得ない。明治中期までの日本とは違い、軍事支出が膨れあがった。大正から昭和にかけて重化学工業の比重が上昇したのは軍需が増えたからであるが、これは明治期の自然な発展パターンから無理やりに逸脱した路線であった。その結果、機械工業や(その少し後には)化学工業の産出高が¹¹、チェネリーの国際標準に比べてはるかに高く記録されたし(1973: 123)(→図6)、経常収支も赤字気味になった。対外交渉条件も悪化した¹²。第一次大戦期には「無制限的労働供給」が一時停止した(安場説; 1980: 154-163)のも、おそらくこの「無理な重化学工業化」と関係があっただろう。安場さんはこの裏の事情について深く追求してはおられないけれども、日本はこのような無理をしなくても十分に工業化を果たせるはずだったと考えておられたのではなからうか。

この種の分析における安場氏のアプローチは、基本的にマクロ分析である。例えば、大恐慌時代の日本の比較的急速な回復を論じた論稿(1988)では、その原因を、価格と賃金との伸縮性と高橋是清のケインズの政策とに求めている。すなわち、(1)二重構造の下層部分(とりわけ農業と小企業セクター)の価格と賃金が伸縮的だったので失業が滞留せず、また(2)金本位廃止、国債の日銀引受による通貨残高の増大、そして財政支出の増加(軍事支出は1930年代から増加気味で1937年からジャンプ)のために有効需要が増大したというのである。

ともあれ、第二次大戦後における鉄鋼業や機械工業発展の種は、このようにして十五戦争期の日本国内に蒔かれた。大戦後はそれが芽を吹いて育ったのは紛れもない事実である¹³。もちろん、この期間を通じて欧米諸国が

¹⁰ Chenery, Hollis B., Shuntaro, Shishido, and Tsunehiko, Watanabe (1962), "The Pattern of Japanese Growth, 1914-1954", *Econometrica*, Vol.30, No.1, pp.98-139.

¹¹ これら二産業の成長は、おそらく日本の中国大陸侵略とも深い関係があった。

¹² 一方では輸出品価格の国内物価との差が縮まり、他方、1930年代以降は円が弱くなって輸入価格の低下が抑制された。

¹³ この点に関連して、中岡哲郎氏が展開された産業技術の淵源調査の成果は貴重である。

らの技術導入の意義も大きかった。

こうして戦間期の機械工業が「異常なまでに」伸びたことが、期せずして第二次大戦後の日本発エンジニアリングの基礎を築いたと知るとき、戦後日本の高度成長の益に与った者としては、成長の隠れたコストもまた大きかったことを改めて思い、自らの襟を正さずにはおられない。

5. 遺された課題

安場さんの比較経済発展論は、歴史を遡るとともに一つの道具箱をかついで地球のここかしこを飛び回る一般政策学でもあった。当然、関心の間口は広く、壮大であった。私達は、このみごとな遺産を武器に手に、日ごとに生まれる新たな問題意識に裏打ちされつつ、マクロとミクロとが有機的に交差する比較経済史を展開したいものである。

[引用著作一覧]

- 1965: "Economic Development in Preindustrial Japan, 1859-1894," *The Journal of Economic History*, XXV, 4 (Dec. 1965), pp.541-546.
- 1968: 「経済発展論における『二重構造』の理論と『日本資本主義論争』」『社会経済史学』34巻1号(1968年4月), pp.79-92。
- 1973: 「工業化と貿易」篠原三代平・馬場正雄(編)『現代産業論1 産業構造』日本経済新聞社, pp.115-132。
- 1978: 「高度成長と高齢者」(『経済研究』29巻2号(1978年4月), pp.97-107.
- 1979: 「明治期海運における運賃と生産性」新保博・安場保吉(編著)『近代移行期の日本経済幕末から明治へ』数量経済史論集2, 日本経済新聞社, 1979, pp.103-131.
- 1980: 『経済成長論』第二版経済学全集12, 筑摩書房。
- 1986: "Standard of Living in Japan Before Industrialization: From What Level Did Japan Begin?: A Comment," *The Journal of Economic History*, XLVI, 1 (March 1986).
- 1987: "The Tokugawa Legacy: A Survey," *Economic Studies Quarterly*, 38-4 (Dec. 1987), pp.290-308.
- 1988: "The Japanese Economy and Economic Policy in the 1930s," in R.G. Gregory and N.G. Butlin, eds., *Recovery from the Depression, Australia and the World Economy in the 1930s*, Cambridge: Cambridge Univ. Press: 1988, pp. 135-147.
- 1996: "Did Japan Ever Suffer from a Shortage of Natural Resources Before World War II?," *The Journal of Economic History*, LVI, 3 (September 1996), pp.543-560.
- 1996: "Economic Policy and Economic Welfare in Japan Since 1980," in John Y.T. Kuark, ed., *Comparative Asian Economies*, Greenwich, Conn. and London: 1996, pp.95-109.
- 2001: 「『歴史制度分析』の挑戦-新古典派数量経済史はゆらぐか」『社会経済史学』66巻6号(2001年3月), pp.69-79。
- 2002: 『東南アジアの経済発展-経済学者の証言』ミネルヴァ書房。

質疑応答

澤田 尾高先生、どうもありがとうございます。安場先生の新古典派ラジカルの視点から議論されてきた、歴史をさかのぼる比較経済発展観という安場先生のお考え方について、非常に分かりやすくまとめていただきました。

それでは、フロアからのご質問、コメント等を賜りたいと思いますので、何かございましたらよろしくお願いたします。

人見 不勉強で教えていただきたい点があります。世界標準に照らした場合の産出高というのをご説明してください。世界標準といえるのはどういうもので実際はどのように定義されるんでしょう。

尾高 要するにクロスセクションの膨大な回帰方程式をつくって、例えばGDPであるとかいったものを入れておいて、説明されるほうは工業の生産高とか農業の生産高というクロスセクションのデータを、全国各地について、データのあるところについてそういうデータを集めておいて、そのリグレッションをはじめ、そのリグレッションの結果、平均的なところを求めるということをチェネリーはやっているわけです。

そのチェネリーが、昔、本で紹介した成果を、これは1960年代の『エコノメトリカ』に載った論文なんですけれども、穴戸、チェネリー、渡部が計算した結果を安場さんは引用していらっしゃるんですね。ですから、あくまでも基になったチェネリーの計算式とデータとが正しければという前提に立った話です。今、あまり詳しい説明ができませんけれども、簡単に言うとそういうことです。

人見 そうすると、各国で比較優位が異なった場合、各国ごとに見てみると、1からずれている国がほとんどの国であるというのが正常な気がします。これだけで今言われたような不自然な工業化の証拠になるんだというのが、よくわかりません。

尾高 これが不自然な工業化ということを少し強調しすぎたかもしれませんけれども、要するに僕が言いたかったことは、1つの世界平均的な標準と比べると、日本の機械工業はダントツにあの時期に伸びたんだなど。それを不自然だとか無理な工業化と言ったのは僕の解釈でありまして、安場さんはそこまで言っていらっしゃるわけではないんですね。

澤田 それでは、あとお一人かお二人、フロアからのコメント等を賜りたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

山本 教えていただきたいだけです。日本が大恐慌から相対的に早く脱出したという話は、どれを読んだらよろしいですか。それに関する安場さんの解釈を知るのに一番いいのは。

尾高 そういう質問をされると、さしあたり僕自身が計算した結果を思い出すんですけども、例えば工業の雇用の回復の速度を見ますと、日本がダントツに早いということが言えます。安場さんが同じようなことをどこかで議論していらっしゃると思いますけれども、どこを読めばいいかということは、探してお答えいたします。

澤田 どうもありがとうございました。

2.2.2 「アジアの経済発展論と安場先生」……………東京大学東洋文化研究所 原洋之介

澤田 では、第1部の第二報告に移らせていただきます。東京大学東洋文化研究所の原洋之介先生からご報告いただきます。

『東南アジアの経済発展』

原 ご紹介いただきました東大の原でございます。安場先生の東南アジア経済研究について何かしゃべれということで、レジュメの代わりに、安場先生の『東南アジアの経済発展—経済学者の証言』について私がかきました書評(『社会経済史学』69巻6号 2004年3月)をお配りしております。この書物には、1973年から2001年へと、ほぼ30年間にわたって書き続けられてきた論考が、そのままの形で収録されています。まさにその副題の通り、安場教授というひとりの経済学者による東南アジア経済に関する「証言」集になっているわけです。

私自身の書評を読むことはいたしません、安場先生の東南アジア経済論に対する私なりのコメントを最後に書いておきました。そこには尾高先生が言われました安場先生が立脚しているとされる「新古典派ラディカル政治経済学」についての私なりの問題提起というか感想が書いてありますので、後で見ただければと思います。

以下追加として書評に書いた私のコメントを再録しておく。

コメント：安場教授の「ほとんど新古典派的な発展論」から「制度学派的発展論」へ

さて我々読者に課された大きな課題とは、本書を通して提示された「新古典派ラディカル政治経済学」に基づく経済発展論

をいかに深めるかであろう。そこで、「人々は経済的インセンティブに反応する」という経済学の最も基本的な命題を前提として、「新古典派」と「ラディカル」という概念をさらに検討することで、安場教授の経済発展論をどう深化させるかに関する私見を述べておきたい。

1. 「新古典派」理論の更なる深化

安場教授の「ほとんど新古典派的」な発展論は、「近代経済成長（サイモン・クズネッツ）」に向けての新しい技術知識やその活用に必要な人的資本の提供という供給側の条件整備を、発展の要因として強調している。しかしそれに加えて「政策においても、軽度で一時的な幼稚産業保護を認めながらも全体として自由貿易主義を主張する新古典派経済学は、基本的に正しい」（プロローグ）とされていることから明らかなように、市場経済がそこへの参加者に与えるインセンティブの重要性も認められている。

東・東南アジア地域以外でも、いわゆる構造改革の実施によって「市場経済に対する政府の愚劣な介入」は除去された国が多い。しかし、多くの国で発展は実現していない。「それは何故であったか」を問うとき、「政府が市場に友好的な政策をとることだけで充分か」という疑問を検討しておくことがどうしても必要となる。つまり政府の市場経済に対する政策介入以外の領域での経済制度のあり様を探り、そのなかで人々にどのような経済的インセンティブが与えられていたかを明らかにすることが必要となってこよう。具体的には、本書の第6・7章「タイ輸出工業の発展」「タイ工業の生産性」で論じられているタイの企業内組織が提供していたインセンティブの構造をより明示的に観察して、それを発展に失敗している他の地域と比較して、市場経済内での成長への動力とはどのようなものであったのかという疑問に答えをださなければならないであろう。

2. 「ラディカル」概念への新しいアプローチ

安場教授は「無条件で新古典派とはいっていない」として「公共政策における分配への配慮が重要である」と強調し、自らの立場を「新古典派ラディカル政治経済学」と規定している（はしがき）。たとえ政治的に困難であるにしても政策によって資産・所得分配を平等にすれば、その条件のもとで市場経済の力によって経済成長が実現するという経済学的命題が、このような命題を理論的に支えているはずである。これは、厚生経済学の第2基本定理を拡張した命題である。評者もこの命題に、決して反対でない。しかしこの命題が、資産分配のあり様と市場メカニズムの作用とが分離可能であると想定していることには、大きな疑問を抱いている。つまり、「公共政策への配慮」が経済成長に結びつくメカニズムに関して、もっと明示的な分析が必要であると考えているのである。

東アジア以外の発展に挫折・失敗した多くの貧困国・地域では、人々は所得を生む資産保有の面でまた民族・エスニシティの面でも、決して同質ではない。こういう地域では、たとえ「市場に友好的な政策」が採用されても、社会の大半の人々が同じようなインセンティブをもって市場経済に参入してくることはないであろう。さらにいえば、人口過剰貧困国では、たとえ政治的に実行可能であったとしても、資産再分配はそれほど有効ではないであろう。先に述べた経済学の基本命題の視点からいうと、初期時点での資産・所得分配の構造とその構造の下で人々に与えられているインセンティブのあり様の分布との間に、存在しているはずの相互連関を解明しなければならないであろう。何故東・東南アジアで経済成長が成功したかに関しても、こういった仮説の下で他地域との比較観察を積み重ねることではじめて、本当に「ラディカル」な見方が得られるのではなかろうか。

安場先生との出会い

さて、私が東大の農業経済学科の学部生であったときに、一橋大学から非常勤講師でこられていた梅村又次先生による経済発展論という講義がありました。この講義のテキストとして梅村先生が指定されたのが、安場先生が奥様とご一緒に翻訳されたりチャード・ギルの『経済発展論』でした。この翻訳本を通して私は安場先生という名前を最初に知ったわけです。

その梅村又次先生から、1970年代の頭だったと思うんですが、「富士山の近くで数量経済史のコンファレンスがあるから出てこないか」と言われて行きました。そこで、尾高先生や西川俊作先生と会い、かつ安場先生にも初めてお会いしました。そこでどういうお話しをしたかあまりよく覚えていないのですが、安場先生とゆっくりと話をするようになりましたのは、1980年代初めでした。

私が農業経済学を勉強する上で大きく影響を受けた大川一司先生が一橋大学を退官された後、国際開発セン

ターの研究担当理事を勤められました。私が東南アジアの経済・農業を専攻していたからだと思いますが、「原君、ちょっと来い」ってしょっちゅう呼び出されて、大川先生のところに入出入りするようになりました。そのころ大川先生は、グスタフ・ラニス教授なども誘われて、日本とアジアの途上国経済との比較研究を組織化されたのです。この研究会に安場先生も参加されていました。先生は、この研究会でタイのチュラロンコン大学のリキット教授との共同論文をかかれています。『東南アジアの経済発展』に「第1章 命運を分けた戦前のタイと日本」として収録されている論文です。制度変化の徹底と不徹底、文化的・経済的遺産の豊かさと乏しさ、模範工場、お雇い外国人、留学生派遣などによる外国からの知識の輸入の有無や教育の差などが、日本とタイの違いをもたらした主要因であって、産業政策の違いは重要ではなかった。こういった仮説が展開されています。私も1975年から1977年までバンコクに滞在したこともあり、タイ経済・農業の研究に熱をいれていた時期でしたので、安場先生に何度か質問をしたことを記憶しております。

安場教授の東南アジア経済論

いよいよ、安場先生の東南アジア経済の研究について何かを話さなければならないのですが、私が話そうと思っていたことは、ほとんど尾高先生にしゃべられてしまったので何にも言うことがなくなって、困ったなと思っています。しかし繰り返しになったとしても、私としての義務を果たすために少しお話をしておきます。

本書の中で最も新しく書かれたエピソード『『幻のアジア経済論』を超えて』に、安場先生の東南アジア経済研究の結論がかかれています。この論文は、ポール・クルグマンの余りにも有名になった論文を、先生流の成長会計分析による批判的検討を試みられたものです。このプロローグについて私は書評で以下のように書いておきました。

その結論を以下のように要約されています。「直接投資を重視した点を除いて、東アジア・東南アジアの諸国の発展は、制度改革と秩序維持を前提として、留学生の派遣、お雇い外人の受け入れ、研究開発と社会資本の重視、学校教育の普及などを強調した点で明治日本のそれと同様だった」。先に紹介した日本とタイに比較発展史の結論も取り入れたこの文章が、教授の経済発展論の最終的結論となっている。さらに、現在経済成長論で盛んに議論されている収斂仮説も念頭におかれているからであろう、「TFP成長率は経済の開放度によっても説明できるから、輸出主導型成長説は間違っていないが、発展論はもっと先進国からの知識の輸入やその消化について注意を向けるべきである」とも指摘されている。以上が、安場教授が東南アジアの経済発展を巡って過去30年にわたって研究されてきたことの結論である。

そして、このような結論を導きだした自らの経済学を「ほとんど新古典派的な発展論」と性格づけられています。このような命名はどういう意味であったのか。私は、書評に書き記した以下文章のように理解しています。そこで再度書評の関連部分をここで読んでおきます。

安場教授はこの「新古典派」という概念を明示的には定義されていないので、評者なりの解釈をしておきたい。本書全体を一読すれば明らかなように、教授は「競争市場という機構は資源の最適配分を達成させる」という厚生経済学の第一定理を肯定される。その上でアジアの経済成長という「長期的現象」を研究課題とするために、この定理の延長線上で構築されているロバート・ソロー以来の新古典派成長論の長期均衡モデルに忠実に、経済の供給サイドに議論が絞られている。そして今紹介したように、成長会計分析の結果は、成長モデルの鍵変数とされている供給要因の重要性をはっきりと示してくれている。また、セオドア・シュルツ以来の個人の異時点間選択に関する合理的行動仮説に基づく教育投資論も、東アジアでは充分に妥当していた。以上のような意味で、教授は「新古典派的成長」と表現されているのであろう。

先ほど尾高先生も指摘された点ですが、経済成長という問題は基本的に長期の問題であるわけですから、「サプライ・サイド」に焦点を当てた成長要因の分析・析出こそが最も基本的作業となるべきであるというのが、安場先生の視点であったのだと考えています。そうであるからこそ、総要素生産性で計られる技術進歩率といった

ことが重要になってくるわけですよ。まさに、安場先生は非常にオーソドックスな新古典派の経済学を見事に利用されています。まさに、非常にシンプルな枠組みを使ったからこそ、シャープな「切れ味」を見せられたのだと思っています。

さらに、先ほど尾高先生がおっしゃられたのですが、安場先生は『経済成長論』の中で、明治初期の高い経済成長は、「強制された自由貿易の体制」下に置かれていたことで生み出されたと議論されています。20世紀に入って関税自主権を取り戻したことで輸入関税率を上げられるようになって、日本の工業化が比較優位に沿ったパターンから歪んだものになったのかどうかといった問題は確かに残っており、評価が分かれるところだと思いますが、いずれにせよ明治中期以降は輸入代替型の工業化を積極的に意図したポリシーが取れるようになった。しかし明治初期には、そういうポリシーは採用できなかったわけです。そのことが逆に経済発展にうまく作用したのではないのか。安場先生はそういう表現はされていなかったように記憶しているのですが、そう考えられていたことは間違いないように思います。このような自由貿易体制下でも、学校教育の充実や留学生を送るということは、間違いなく政府が果たすべき重要な役割になるとも先生は考えられていた。しかしそれ以上に、着実な経済発展を引き起こすのは、非常に広い意味でのインターナショナル・マーケットの力であるという見解をもたれていたように思っています。安場先生は、さっき言及しておいたサプライ・サイドを強化させるのは、市場経済というメカニズムなしの体制だとはっきりと確信されていたと思います。

また先生は、現地での自らの企業調査に基づいて、タイ製造業の企業レベルでの生産性の実証分析を試みた2つの論文、「タイ輸出工業の発展」と「タイ工業の生産性」を1980年代初めに書かれています。特に、タイ系（華僑系）企業の総要素生産性成長率が欧米系企業のそれより高かったことを発見され、『東南アジアの経済発展』としてまとめられるときに、「初期の輸入代替産業が家産制国家論の延長線上に立ち、停滞的になりがちなものに対して、輸出工業は競争の荒波にもまれるだけに、それだけ技術進歩率が高いはずだと考えていた」ことが、ほぼ確認されたと「はしがき」で自ら証言されています。

これらの論文は私にとって大変おもしろかったので、先生が調査されて集められたデータについて1度お聞きしたことがあるのですが、そのとき、あまり機嫌がよくなかったのか（笑）、うまくお答えをいただけませんでした。いずれにせよ自分で調査をされて、企業データを積み上げて生産性が伸びているということを見つければ、タイの経済成長というのはどうも本物じゃないかと考えられたことは間違いがないと思っております。こういう調査・研究が東南アジアの経済成長は「ほとんど新古典派的な発展論」で説明できるという先生の確信を支えていたのだと思います。

安場先生にもっと研究してほしい課題

以上のように安場先生の東南アジア経済研究について考えているのですが、それでも私にはどこか不満が残っています。安場先生は『経済成長論』の中で展開されている経済発展に関わる多様な側面をもっと直接的・具体的に研究し、取り扱って欲しかったと思っていますからです。例えば、日本における経済発展過程に関して、労働過剰から不足への転換点がいつであったか。またこれは農工間労働移動を決めた要因であったはずの賃金水準がどういうメカニズムで決定されていたのか、それにはマーケット・メカニズムだけでなく、村落共同体といった制度が必要な役割を果たしていた。途上国の経済発展に関わるこのような重要な論点やそれを分析するためのモデルについて『経済成長論』は実に見事な議論を我々後輩に提示してくれているのです。

『経済成長論』を読んで私が一番強く影響を受けましたのは、労農派と講座派の論争とラニスとフェイや大川先生の二重構造的発展モデルとを組み合わせた議論の個所でした。あるひとつの国民経済が発展していくのには、新古典派が薦めるような自由貿易政策が必要で、それによってその経済で比較優位のある産業が育てばいいわけです。しかし、こういう比較優位のある産業の成長が、それ以外の産業の動向なし成長パフォーマンスとどうリンクしているのかといった、産業連関なしの国民経済全体の構造変化の分析を、『経済成長論』の中で非常に重要な課題として取り上げられていたはずですが、しかし、安場先生の東南アジア論の中にはこういう議論がほとんどないのです。これこそが安場先生の東南アジア経済研究に対して私が不満を感じている最大の論点なの

です。産業間での労働力移動の形ないしパターンといったことまで含めた議論を、東南アジア諸国の経済をもっと積極的にやっていたらおれば、われわれレート・カマーにとっては非常に役に立ったはずであると思っています。安場先生が『経済成長論』の中で書かれたような視点から東南アジアをどう見られていたのか、もう少し知りたかったなというのが正直なところです。そういう議論があると、先ほど尾高先生もおっしゃいましたが、所得分配の問題について、「公平をもった経済成長」を実現させるためにどういうポリシーが必要なのか、あるいはポリシーではできないことがあるのか、このあたりの見極めが、もう少し具体的についていったのではないかと思っているわけです。

今不満というやや変な言い方をしましたが、先生がもっと長くお元気でいられば以上のような領域での研究をおこなってくれたのではないかと考えています。今日のような会にでなければならなくなったことが、残念ではありません。

経済学者の論争

最後に『東南アジアの経済発展』の「プロローグ」について話したく思います。その中身については、皆さんご存知だと思いますので一切触れません。私は、書評の中に、「本書の中で異色であり刺激的なのは、プロローグに収められている1991年に書かれた『東南アジア発展論の検証』であろう」と書いておきました。「ここには東南アジアの工業化や発展というのは決して本物ではないと論じた家産制国家の論理やErsatz資本主義論が徹底的に批判されている」。「しかし、本書に収録されている2人の論者の反論を読んで、時にはこういう論争も必要であろうと感じるのは、1人書評者だけではありません」とも書いています。

ここからはまったく余談になってしまいますが、私は播州赤穂生まれです。突然変なことを言いましたが、幼稚園までは大石蔵之助の屋敷跡が私の遊び場だったのです。ここに来る前に、東大の図書館に行って古い絵を見て確認をしてみました。大石蔵之助が細川藩で切腹をしたときの介錯人が安場一平という人物でした。そしてこの安場一平こそが、安場先生の古い先祖なのです。実はこのことは、安場先生とちよくちよくお会いしていた80年代はじめに気がついていました。そして、もうひとり先生の曾おじいさんに当る方に、明治初期に福島・福島の県令や第6代北海道庁長官を務めた、1835年に熊本に生まれた安場保和がいます。このことは、ごく最近知りました。

幕末期熊本には、有名な横井小楠という人物が中心になりまして、熊本実学党という下級武士と豪農とが主体となったグループがあったことはご存知の方も多と思います。横井小楠は殺されるわけですが、熊本実学党は、明治維新後の熊本県で明治3年から4年にかけて、細川護久を知事とした実学党政権をつくります。この政権に大参事候補、後に小参事として、現代風にいえば副総理みたいな格で安場保和氏が入っているわけです。安場保和以外には、徳富蘆花、蘇峰の父親である徳富一敬や、横井小楠の弟子で小楠の奥さんの姉の夫の竹崎という人物が入閣しているのです。

この政権は長持ちしませんでした。熊本実学党のグループが熊本洋学校という学校をつくり、レロリー・ランシング・ジェーンズという、クリスチャンのアメリカ軍人を先生に連れてきています。ここで英語の教育などを行っているのです。ここに若い熊本の人たちが集まった。そのきっかけを安場先生の曾おじいさんあたりがつかっていたわけです。

徳富蘇峰、蘆花の兄弟はこの熊本洋学校の卒業生です。横井小楠の息子時男もこの洋学校で学び、同学の海老名弾正と一緒にその後「熊本バンド」といわれることになったプロテスタントの組織をつくりあげています。このバンドは、内村鑑三などの札幌と、新島襄らの横浜とならんで、明治日本に生まれた3つのプロテスタント組織の一つとして歴史に名を残しています。余談ですが、横井小楠自体がクリスチャンだったから暗殺されたんじゃないかとも言われています。

実はこの洋学校から、後に東京帝国大学農科大学の重要教授となる横井時敬という人物が出てくるんです。この横井時敬は、榎本武揚に頼まれて東京農大の初代学長にもなっています。安場先生の話に持っていくのに時間がなくなりそうなんです(笑)、もう少しご辛抱ください。横井時敬というのが非常に論争好きで、口の

悪い人で有名だったようです。大正3年の日本社会政策学会で、日本農業保護論、小農保護論という大論争が行われています。その座長は新渡戸稲造が務めているのですがここで横井時敬が報告をします。それにコメントをしたのが、当時慶応にいた福田徳三です。二人は、現代日本の農業保護論争とまったく同じで、米価を上げるか下げるかをめぐって大論争を行っています。「米価を上げて保護しないとつぶれる」と横井時敬が言うと、福田徳三は「米価を上げるから規模が拡大しないんだ。下げろ」と主張しています。東大農業経済学科の教授であり横井の講義を受けた東畑精一先生は、「横井時敬は、理論に閉じこもる人ではなく、世間街頭に出る闘士、守勢沈黙の士ではなく攻撃能弁の人であった」というような人物評価をされています。

横井時敬は非常にまじめな学者でして、そのためであると思いますが、すぐ論争をしかけるというか、意見が違うと同僚でも必ずやっつけるというタイプの農学者だったようです。ここでいよいよ安場先生の「プロローグ」に話題を戻します。安場先生が東南アジア経済の将来を誤って語ったとして批判した「家産制国家」論というのは、安場先生よりは若かった東南アジア研究所の同僚矢野暢氏です。そして、この矢野さんは実は熊本の人なのです。長い余談になってしまいましたが、要するに私は、安場先生が以上に紹介したような明治以来の熊本武士・知識人の血を引き継いでいたのではないのかということをお願いしたかっただけなので（笑）。

多くの学会だけじゃなくて、ジャーナリズムもそうですけれども、どうも日本には本当の意味での生産的な論争がしにくい風土があるように思います。特に学問の世界なんかでは、権威うんぬんじゃなくて、本当に真剣な論争というのはどういう手続きでどういう形でやるのかということ、ちょっと考えてみなくちゃいけないんじゃないか。安場先生がこの本を書かれ、そして非常に刺激的なプロローグに収められた論文を書かれた意味というのは、学問における論争、議論を生産的にするにはどういうことが必要なのかという重要な問いかけを、我々にしてくれているのではないかと考えているのです。

すみません。ほとんど余談だけになってしまい長くなってしまいました。これで終わります（拍手）。

質疑応答

澤田 原先生、どうもありがとうございました。門下生の1人として、実はプロローグを読んだときに少しはらはらしたんですけども、今日のお話で、安場先生があのプロローグを書くに至った歴史を安場先生ふうになさかのぼっていただきまして、大変よくわかりました。ありがとうございました。それでは、原先生のご報告に関しまして、コメント、討論等ありましたらお受けしたいと思います。

まず私のほうから。ちょっと的外れな質問かもしれませんが、原先生が1点不満に思っただけという、日本で非常に精緻な形で二重構造を検証された安場先生の理論を、東南アジアにどうやって応用していくかという点についての質問があります。日本で起こったような転換点の研究というのは、例えばタイについて池本幸生先生がやられたと思います。もう少し経済構造変化、あるいは所得分配の長期的な変化というような観点から見て、東南アジアでは日本とかなり似たような点もあったと原先生はお考えですか。国が違えば個別の特徴もあるわけですけども、そのあたり、何か先生自身のお考えがありましたらお願いします。

原 非常にむずかしい質問ですけども、似ている国もあるだろうし、違う国もあるというのが、当面の答えです。相続のあり方も含めた家族構造、村落の構造、土地所有の形態などが、日本と東南アジアとではずいぶん違いますので、安場さんが日本の歴史的経験から抽出されたような二重構造モデルが、東南アジア諸国にそのままアプライできるかどうかは大いに疑問であると思っています。

それからもうひとつ研究にとって重要と思っていることは、歴史的な経済統計の有無です。明治以来の日本では、政府かどうか別ですけども、断片的でもさまざまな記録や統計類が残っていますよね。しかし、東南アジア諸国に同様の記録や統計はどれほど蓄積されているのかは、大きな疑問ですよ。ですから、転換点や所得分配の時系列的変化に関して、東南アジアで日本と同じような事象が起こっているのかも知れませんが、それを長期的資料・統計に基づいて実証することは、今のところ大層難しいのではないかと考えています。

澤田 もう1点、私には非常にパズルだなど思う点がありまして。尾高先生のご報告、それから原先生のご報告で、安場先生のお考え方として、明治の日本というのは、外圧といいますか外政的に自由貿易というシステム

を植えつけられ、それがよかったんだという考え方が、安場先生の議論の中に鮮明に出ているかと思います。これをタイのケースを比べた場合に、私も専門ではないんですが、不平等条約を結ぶということで似たような状況にあったと思うのです。この点について、安場先生も少し書いておられますように、自由貿易を始めたとしても、資源が比較的豊富な国だと、長期的な発展につながらない、一種のオランダ病のようなものが生じるということもあり得ると思います。

そういうところで考えると、日本が自由貿易を初期段階で採用したことでうまくいったということは、本当に一般化できるのかどうか。その特殊性、普遍性というのはどういうふう整理すればいいのかというところが、ちょっとパズルかなと思うのですが、この点については何かコメントなどはございますか。

原 それは私より尾高先生のほうが詳しいと思うんですけれども。いろんな議論があり得ると思うんですけれども、少なくとも私にとって非常に印象的であったのは、30年ぐらい前に西川俊作先生が山口県の明治維新直前の産業連関表をつくられてみてこの地域が当時の学会の常識以上に工業化していたという話を聞いたことです。江戸期に既にいろんな産業の蓄積があった。ヒューマン・キャピタルの蓄積までを含めてですけれども。そういう意味でのファクターと蓄積が、タイの場合は全然違ったと思いますね。

日本は明治維新のとき約3000万ぐらいの人口ですよね。この人口規模においてすら耕地の拡大が、北海道を除けば、ほぼ限界にきていたのです。明治維新以来約150年間に、日本の耕地面積は北海道しか延びてないわけですから。19世紀半ばのころ、タイはこのような日本の状況とはまったく異なっていました。人口はほぼ500万程度といわれており。かつチャオプラヤー河の下流部にはだれも使っていない広大なデルタが存在していたわけです。したがって、ボーリング条約によってタイが明治日本と同様の強制された自由貿易体制下に組み込まれると、だれも使っていないデルタの活用に人々が動いていくことはある意味では当たり前のことであったわけですが。当時の世界経済のなかでタイが比較優位をもっていた産業に、それは大規模な輸出米作りであったわけですが、資本や労働が一挙に動いていったのです。

ここで、まだうまく経済学が解明していないパズルがあるかと思っています。それは、タイの米のように比較優位のある産業へと特化していくことが、世界経済や国内経済の変化に適応して、どのようにして次のステップに転換していけるのかという問題です。私は、ある産業にあまりにも強い比較優位がありすぎると、かえって次のステップに転換させることが困難になるのではないのかとすら思っています。いずれにせよ、比較優位のある産業が成長している経済局面で、次のステップへの転換に向けて政府がどういう役割を担うべきかといった問題まで含めて、このパズルに挑戦してみる必要があるかと考えています。日本とタイの150年を比較するのであれば、そういう議論をやるべきかなと思っています。

澤田 原先生、どうもありがとうございました。(拍手)。

2.3 第2部：「安場先生の思い出」

人見 あいさつを大阪大学大学院経済学研究科の阿部武司先生にお願いします。皆さん、グラスを持ってください。

阿部 僭越ながら最初にごく短くお話しさせていただきます。私は、安場先生とは今から20年以上前に、たびたびお話に出てきた数量経済史カンファレンスで初めてお目にかかりまして、その数年後の1988年に大阪大学に赴任し、しばらくご一緒したわけでございます。こういうことを申し上げるのは失礼なのかもしれませんが、初めの数年間、先生は鬱状態といいますか、ご健康があまりすぐれず、お話しする機会もなかなかなかったのですが、ある時突然お元気になられ、それから頻繁に私の研究室にもお見えになり、いろいろな議論をされ、また、「こういうデータはないか」というようなことを朝でも夜でも突然尋ねにこられることが増えました。それらも今になりましたは懐かしい思い出です。

先生からは、ご生前様々なご教示いただきましたが、今後もご著書やご論文を通じまして、いろいろ教えていただくことがまだあると思っています。それでは、安場先生からこれまでに頂戴し、これからも賜るであろう学恩に感謝して献杯したく存じます。ご唱和ください。献杯。どうもありがとうございました(拍手)。

2.3.1 メッセージ

人見 どうもありがとうございました。本日来られていませんが、一橋大学経済研究所の清川雪彦先生と同大学名誉教授の篠原三代平先生がお寄せ下さったメッセージを紹介します。

清川雪彦

飯田：清川先生のメッセージを紹介させていただきます。「真摯な学問への姿勢を偲ぶ」というタイトルがついています。

私が初めて安場さんにお会いしたのは、確か1970年代中頃の六甲コンファレンスの折だったと思います。同室になり、ともに綿紡績業のペーパーを報告したこともあり、大いに話はずんだことをよく憶えています。安場さんは、教養学科の先輩にあたり、その後同じく経済学部の大学院へ進学されたこともあって、村上（泰亮）さん同様、早くからそのお名前は存知あげていましたが、お会いしたのは確かその時が最初だったように思います。

その後、数量経済史関係の研究会で時々お会いするようになりました。ただ安場さんが狭義の数量経済史研究の積極的な信奉者だった（？ ように思う）のに対し、私の場合は、そのカウンターファクチュアルな手法や歴史データを均衡値と解してゆく一部の立場には、やや違和感（実際の分析ではほとんど差異はないのだが、イデオロギー的に）を覚えたため、何度か数量経済史研究会のメンバーへのお誘いを受けたものの、固辞したこともあって、この分野で御一緒に仕事をする機会は遂にありませんでした。

ただ大川（一司）先生が、国際開発センターを拠点にアジアの比較発展分析のプロジェクトを立ち上げられたため、そこで数年間御一緒（安場さんが日・タイの比較を、私は日印の比較を担当）することとなり、いつも安場さんの鋭いコメントに大いに啓発されたことが、今となってはなつかしく思い返されます。

また安場さんはアジア経済学会などの学会にもよく出席され、フロアから必ずといってよい程積極的にコメントをされるのが常でした。とかくアジア研究が事実のみの精緻な確認作業に終始しがちなのに対し、安場さんは経済理論ないしは経済学的枠組みに基づいて分析することを強く主張されることが、多かったように思います。この意味で、市村（真一）先生ともども、アジア経済研究のレベルアップに大きく貢献されて来られたと思います。

また安場さんがコメントをする場合、とかくその内容自体に没入し、熱い議論をすることが多かったと思います。したがってその相手が大学院生であれその道の権威であれ、問題自体の真偽の観点から議論をするので、結果的にかかなり厳しいコメントになることも、時にはあったようです（ただ何故か、経済史の仕事に対しては点が甘かった印象があります。どうしてでしょうか？経済史家にはジェントルマンが多いからでしょうか。でもここに何か安場さんが本当にやりたかったことの秘密があるような気もします）。しかしこれは彼の学問に対する真摯な姿勢の結果であり、本当の意味で親切なコメントであったと思います。事実、安場さんの主要な論文は、長い間暖めておいて、他からのコメントなどを踏まえ少しずつ改善してゆくというスタイルにもそれは現れていたといっよよいと思います。

今日のように学問が技術化・細分化し、経済学者どうしの間ですら十分な意思疎通が困難な時代、安場さんのように広い関心と学識を備えた研究者を失ったことの痛手は、非常に大きいと思います。今となっては、あれもこれももっと議論をしておけば良かったと悔まれますが、遅きに失し残念至極です。ともあれ御冥福をお祈りいたします。

篠原三代平

飯田：続けて篠原先生のメッセージを紹介させていただきます。「安場保吉さんとの思い出」とタイトルが付いております。

生前、私は安場さんとは何回か文通したことがあり、お互い論文や書物の交換をともにした仲でした。以下思い出になる点を5点ばかり要約させていただきます。

私はかつてハーバードを訪ねたとき、クズネッツ先生のお宅で1泊したことがあります。その際、クズネッツ夫人から「日本の経済学者の中でも、主人は安場さんを特に高く評価しています」と言われたことが強く念頭に残っています。おそらく彼の『アメリカ白人出生率1800から1860年の分析』（ジョンズ・ホプキンズ大学、1961年）のことかと存じます。それ以来、私は安場氏の書物を特に注目するようになりました。

安場氏はプリンストンで国際経済学の講義を持たれたことがあります。おそらくマハループ先生の推薦で講義を引き受けられたんだらうと思いますが。そのマハループ先生は、「安場君は1970年前後の円レートの切り上げと、そのフロート化を主張した数少ない論者の1人だった」と述べられたことがあります。実は私もその1人だったと思うのですが、何でもすぐ英文にしてしまう安場氏の議論のほうが、国際的に伝わりやすかったでしょう。それ以後、彼に一目置くようになりました。

私は、『工業水準の国際比較』（アジア経済研究所、1965年）で国際間の横の工業生産指数の作成を意図したことがあります。しかし、本になる前に、私の書いたある論文中、指数算式上のミスがあることを安場氏が指摘されたことがあります。この指摘のおかげで、私の書物はそのミスを免れることができました。この点、彼に感謝しなければなりません。と同時に、これがその後、私が彼に頭が上がらなくなった理由の1つかと思われます。

安場氏の論著『東アジアの社会発展論』（2005年）は、多分彼が躁状態に移行したときの作品かもしれません。そこでは何人かの人がなで斬りにされているからです。幸い私自身はこの点では以前から安場氏と同意見で、私もほぼ同じ考え方に立つ論文をすでに和文、英文双方で発表していました。彼のなで斬りを免れたのはそのためでしょう。そのとき、いつか私の論文を彼にお送りしたと思いますが、とうとう彼の他界によって、彼からコメントをいただく機会を逸してしまいました。

私やチャールズ・ホリオカ氏は、2001年初頭、消費税切り下げとその切り上げを組み合わせる国内需要を浮揚させる政策措置の論議をしたところ、安場氏はまったく同じ意見で、これが後に中谷巖、猪木武徳、篠原、ホリオカ、安場の共同提言「デフレ克服、所得税減税、消費税率を上げよ」（『朝日新聞』2002年11月28日記事）となって結実しました。（そのとき、消費税切り下げの代わりに、所得税減税を先行させる案に代ったのは、安場氏の意見によるものです。）この考え方に賛成する人は少人数でしたが、そのまとめ役になったのは安場氏でした。

以上のほか、安場氏は、戦前、明治以降の工業生産指数を作成した人ですが、私も一橋大学でまとめた『長期経済統計・鉱工業』（東洋経済新報社）で、彼が得た結果を私の推計結果に比較する機会を持ちました。そのほか彼の明治期の賃金格差等の分析も、学会でコメントする機会があったことを記憶しています。

別にとくに意図することはなしに、結果的にわれわれ2人の経済分析や推計がこのように重なり合うことが多かったということは、まったく意外です。今は彼のいくつかの刺激に感謝するとともに、安場氏の冥福を祈る次第です。

2.3.2 安場先生の思い出

人見 どうもありがとうございました。

またしばらく歓談していただいて、10分ほどしてから皆様から安場先生の思い出を語っていただきたいと思います。心の準備もおありでしょうから、順番を言っておきますと、初めに中村隆英先生にお願いします。次に江崎光男先生、山本有造先生、内海洋一先生、榊原隼夫先生、岡崎哲二先生、それで最後に市村真一先生という順番で考えております。よろしくお願いします。

中村隆英

人見 それでは、そろそろ皆さんに安場先生の思い出を語っていただきたいと思います。中村隆英先生、お願いします。

中村 中村でございます。安場さんのことだと、いろんな思い出があるんですけども、1つだけ、最初に知り合ったときの思い出をお話ししようかと思います。

東大には駒場に教養学部教養学科というのがありまして、そこに成績のいい学生が集まっていた。特に初期には大変な秀才が集まりましたから、教養学科からは優秀な大学教授が後からぞろぞろ出ました。名前を挙げますと、例えば関西では芳賀徹さん。彼が1回生です。私と似たような経済をやった人間で言えば、村上泰亮さんが教養学科の卒業生でした。その芳賀君や村上君と同期だったのが安場さんであります。彼は教養学部のアメリカ科を卒業しました。

当時のアメリカ科では、恐ろしくおっかない中屋健一さんというアメリカ史の先生が当時の主任であった。安場さんは中屋さんにしごかれたんですね。どのぐらいしごかれたかちょっと例を申しますと、マイクロフィルムで撮った英文を裏返しにそのまま焼き付けちゃうというんですね。だから、右のほうから裏文字のABCがならぶわけです。それを裏返しじゃないのと同じスピードで読めなきゃだめだっていうんです(笑)。中屋先生はそうやってギューギューしごいたらいいんですな。そのようにしごかれてアメリカ史を勉強したのが彼でありました。

しかし、その後で結局、日本の工業生産指数の研究をやるようになりまして、ちょうどその論文が2つ出ました。2つというのは、篠原三代平さん、当時すでに大家でございましたが、その篠原さんのと安場さんのと両方同時に出ました。ところが、結果的に見ますと、この2つの数字はほとんど食い違いがありませんので、やっぱりこうなるんだと皆納得しました。日本の産業発達の最初の数字が、大学院時代の安場さんと大家であった篠原さんと2人の論文が一致したことで、あとは議論がなくなったという記憶があります。

その指数の計算を安場さんがやっておられましたときに、私は彼とお付き合いはなかったんですけども、夜になりまして、だいぶ遅くなってからドンドンたたいて、安場さんがうちに現れて、「お前のところにこういう本があるはずだが」という。学校の本を借りてたんですけどね。「この本をぜひ見たいからすぐ出せ」と言うんです(笑)。はっと言って恐れ入って本を出したのが最初の記憶です。それ以来何十年のお付き合いがございました。特に数量経済史研究会(QEH)のメンバーとしてのお付き合いは非常に長かった。だから、亡くなられたときに、大げさに言えば、ひとつの学問の一生が終わったというような感じがしました。

長くしゃべると切りがございませんので、このぐらいでご勘弁いただきます(拍手)。

江崎光男

人見 中村先生、非常に興味深いお話をありがとうございました。次に江崎先生、お願いできますか。

江崎 名古屋大学大学院国際開発研究科の江崎と申します。安場先生は、今、中村先生がお話になった東京大学教養学科の、13年先輩に当たります。不肖私は、今お話の初期の優秀な教養学科の方ではなくて、中期にあたりますが、経済発展の分野では、清川さんが1年先輩で、柳原透さんが数年後輩になります。教養学科では存じ上げなかったのですが、市村先生にお呼びいただき大阪大学社会経済研究所へ1968年に助手で参ったときに、安場先生が経済学部におられました。そして私が京都大学東南アジア研究センターに1969年に移ったときに、安場先生もちょうど同じころに移られてきて、それから10年ぐらい、直接薫陶を受けたという関係でございます。

安場先生は、いわば教養学科的というか、多くの分野で活躍されて、先頭(戦闘)集団に常に属しておられたと思います。1971年に私はハーバード大学に留学しましたが、経済史のヘンリー・ロソフスキー教授の授業を取りましたら、あるときニュー・エコノミック・ヒストリーあるいはクオンティタティブ・エコノミック・ヒストリー、クリオメトリックスの講義がありました。そのときに何人かの名前が出て、2番目か3番目にプロフェッサー・ヤスキチ・ヤスバの名前が出まして、クリオメトリックスのファウンダーズの1人であるというお話をお伺いし、日本人として大きな誇りを感じた次第です。

それにつきましては、安場先生の『東南アジアの経済発展』の前書きの部分によれば、マクロスキーさんも同じように安場先生はクリオメトリックスの創始者の1人であると書かれているとのこと。安場先生ご自身は、クリオメトリックスの一員であり、かつ日本では日本経済史の学会の強力メンバーであり、東南アジア研究

の第一人者であり、もう1つ何かありましたですね（笑）、専門分野を非常にたくさんお持ちで精力的に活躍されていました。かつ最近というか4、5年前までは、国際開発学会でよくお会いしてお話を伺う機会がありましたけれども、エネルギー問題で、もう日本はエネルギーの心配はない、解決された、太陽エネルギーで十分だ、それを証明するための論文を送りますということで、専門誌や『朝日新聞』に書かれた論文コピーをいただいたことがございます。本当にいろんな分野に手を染められ、最後まで先頭集団で頑張ったというか、活躍された先生だったと思います。

安場先生がジョンズ・ホプキンス大学に学ばれたことは存じておりましたが、ロバート・フォーゲル教授と親しいクラスメートであったことは、同教授のメッセージで初めて知りました。私が大阪大学にいた1968年か、京都大学に行った1969年以降なのか記憶が定かではないのですが、安場先生がフォーゲル教授を招かれて研究会をなさって、後でクーラーのない部屋で夕食会を開いたときに、開けっ放しの窓から蚊が飛んできてフォーゲル教授の頬にパッと止まったら、安場先生がパチッと叩き落とした（笑）。そのときはノーベル賞をもらう前でしたから、ノーベル賞をもらった後だったらどうなったのか興味のあるところですよ（笑）。あら、すごいことをなさるなと思ったんですが、きょうのメッセージで、本当に親しいクラスメートだったということを理解いたしました。

東南アジア研究センターには1980年までいらっちゃって、1980年に原さんも名著と言われた代表作の1つである『経済成長論』を書かれた。『経済発展論』で書かれるのかと思ったら、まさにクズネツ教授の『モダン・エコノミック・グロース』に対応する自負心で書かれたんだと思いますが、『経済成長論』を書かれつつあったんですね。その頃、私は、購買力平価でクレイプス、ヘストン、サマーズのUNICP（国連国際ナショナル・コンパリズン・プロジェクト）について研究会に参加していました。ある時、安場先生とセンターの廊下で立ち話をして、『エコノミック・ジャーナル』に“Real Product for More Than One Hundred Countries”という彼らの論文が出てますよ」とか言ったら、「これはいいことを聞いた」って、それであの本にその論文が何回か引用されるようなところがありますけれども、安場先生の名著に私もささやかな貢献をしたのかなと思っています（笑）。

1980年に大阪大学に代わられて、直接薫陶を受ける機会を失いましたけれども、その後は、特に国際開発学会なんかで一緒させていただいて、つい最近までいろいろご教示いただきました。本当にどうもありがとうございます（拍手）。

山本有造

人見 山本有造先生、お願いできますか。

山本 安場先生には、朝、お電話をいただくとか、大学に誘っていただくとか、あるいはただでご飯をおごっていただくとか、何回か共通した経験のある方はこの中にも多いと思いますが、ただ、このへんの話は宮本又郎さんが一番適任者でありまして、多分一番最後ぐらいに宮本さんが話をされると思いますので、省略いたします。

先生は、概して言えば理論家、あるいは特に発展論の関係の方には極めて厳しいコメントをされる方でしたけれども、どちらかと言うと歴史の者にはお優しくなったように思います。そのことで先生にエンカレッジされた若い者がたくさんいるのではないかと。私も実もその1人でして、1970年に毎日新聞から出ました『現代日本経済研究の成果と展望』というものの中で、私の論文をリファアーをしてくださいました。私はその当時国際収支の推計というのをやっておりましたけれども、誰にも褒められもせず、誰にも相手にもされずにいた時代に、初めて先生のサーベイ論文の中で褒めていただきました。

しかし、今回調べてみたら、実は褒めてはいませんでした（笑）。建元・馬場推計みたいな国際収支の推計がある、それから山本の推計がある、それから自分の産業生産指数のインデックスの指数がある、最近こういうものが出てきたと、ただそれだけ書いてあったんですけども、私自身はとにかくすごく褒められたという印象をそのとき以来持っていて、安場先生には一方的に親しい感情を持っておりました。そういう意味では最初に

安場先生にエンカレッジされたことを、今でも大変印象深く思っています。

先生の能力は本当にいろいろありましたけれども、今日のお話の中で出なかったことの1つには、先生のあの能力で書評をすることと、それから学会のサーベイをすることがありました。例えて言えば、『長期経済統計』全14巻を1人で書評できる能力というのは、中村隆英先生か安場保吉先生しかおられないと思います。お二人とも書いておられますけれども。全14巻をまとめて面倒見て書評ができる能力というのは、日本でも多分何人かのうちの1人であったということがあります。それからもう1つは学会サーベイ、特にニュー・エコノミック・ヒストリー関係のサーベイです。実は一昨日、私の勤めています中部大学で必要があって、私がかこれに関する報告をいたしました。先生の10本ぐらいのその関係のご論文をまとめてしゃべった次第でした。論文の性格上やがて少しずつ古くなるかもしれませんが、安場先生の能力というのはそういうところにもあって、ああいうものを読むと、先生の持っていた幅の広いいろんな関心というものが、よく分かるなという気がしております。

多分安場先生、自分はニュー・エコノミック・ヒストリアンであると思っておられたのであろう。単著として出たものは、結果としては『経済成長論』でしたけれども、もう少し長命でおられたら、最後のほうに日本経済を中心としたお仕事がまとまって、(きょうの報告で尾高さんが言われたことが正しかったのか、間違ってたのか知りませんが(笑))、そういうものとしてわれわれの前に現れてくれれば、私たち歴史家としては本当にありがたかった。先生自身は、自分はニュー・エコノミック・ヒストリアンであるということ誇りにもし、そこを自分の本領だと思っておられたのではないかなということ、最近、考えています。

先生にエンカレッジされた者の1人として、今日ここで話をさせていただいたことを感謝します。どうもありがとうございました(拍手)。

内 海 洋 一

人見 山本先生、どうもありがとうございました。次に内海先生、お願いいたします。

内海 内海でございます。安場さんとは、大阪大学、それから大阪学院大学を通じまして、2つの大学でずっと一緒にさせていただいてまいりました。

いろんな思い出がございますが、私がお大阪大学の経済学部長をしますときに、安場さんが、自分の先生だと思いますが、フリッツ・マハループというジョンズ・ホプキンス大学の先生を招かれました。そのときに、「偉い先生やから学部長も迎えに行ってくれ」と言われまして、大阪空港まで安場さんと自動車でお迎えにまいりました。安場さんは英語は母国語のように堪能ですから、いろいろと話をしてくださいました。私はドイツ語のほうが少しましなんで、ドイツ語でフリッツ・マハループ先生にあいさつしましたら、マハループ先生、「ゲーエルター・エア・デカン (geehrter Herr Dekan)」——尊敬する学部長様と私に呼びかけられました。ああいうことは手紙では使うけれども、口では言わへん言葉やと思てましたら、2回も3回も「ゲーエルター・エア・デカン」と言われまして、非常に恐縮しました。学問の国といわれたドイツではこのように学者を重んじるんだらうかと思ったことがございます。

安場さんは人の世話を非常によくしました。マハループ先生の奥さんが水泳をなさるんですね。かなりのおばあちゃんやっただすけど。水泳を自由にできる場所はないかとあれこれ探して、プールのあるホテルを見つけに来て、ここで水泳してなさいということまで決められました。マハループ夫人はそこへ行って水泳をしておられたようです。現場は見たことはありませんけれども。

外国人が出ましたついでにもう1人申しますと、私、安場さんより少し早く大阪学院大学に行つてまして、いい先生を引っ張ってこんならんと狙つてましたら、安場さんがもうすぐ定年だということをお聞きしました。それで早めに連絡をつけまして、大阪学院大学に来てもらったわけでございます。それで阪大、大阪学院大学を通じて二十何年か一緒にいたわけでございます。

大阪学院大学では、安場さんは、ウィリアムソンというアメリカの大学の教授を招かれまして、講演会とか学生への講義とかいろいろなさいました。このときも安場さんのサービスは大したもので、ウィリアムソンさんが野球が好きだと言え、どこからか切符を手に入れてきて、ちゃんと野球を見に連れて行きまして、そして大変

な満足を与えておりました。

もっとびっくりしたことは、ウィリアムソンさんをカラオケに連れて行っているんですね。日本人はカラオケを知ってるけれども、「ウィリアムソンさんはどうしてました？」って尋ねたら、結構ジャズみたいなものを歌ったそうですね。だから、日本の現代的な楽しみを外国の学者にも与えとるわけでございまして、そういうサービスに本当に感心いたしました。

私は、安場さんと学問的な交わりよりも、そういう事務的なことや学問外の交わりが多かったです。先ほど高阪さんが「学問以外の話を全然せん人やった」と言いましたが、私は学問外のことを専ら話してたわけです。学問外のことでどんなことがあるかと言うと、私、不眠症でありまして、眠り薬をよく使うのでありますが、安場さんも似たような傾向を持っておりまして、睡眠剤についての話をよくいたしました。

私はそんなに株に投資をたくさんしているわけじゃありませんが、株の話も安場さんとよくしました。一昨年の春だと思いますが、株の値がだいぶ回復して、グッと上がったときがありますね。一昨々年ですかね。春、久しぶりに株が回復してきたときがあります。そのときになんかもうかったということを安場さんが言ってまして、「経済学者で株でもうけたのは、リカード、ケインズ、サムエルソン、その次がわしだ」と言っていたことがあります。

そのことをロイヤルホテルで行われた大阪大学名誉教授会のときにも自ら話されていましたが、その帰りがけに、経済学部の名誉教授であった私とか藤田晴教授とか、それから作道洋太郎さんも来てましたかね。ロビーで安場さんが「ちょっとお茶を飲もう」と言って喫茶室に入って、アイスクリームをごちそうしてくれたんです。それが株で大もうけた成果でございまして。デプレッションになるときもありましたけれども、非常に陽性で、楽しい人でございまして。

1つ忘れましたが、歌もなかなかいい声で歌うんですね、安場さんというのは。紛争前には阪大の経済学部では新入生歓迎パーティーというのがありました。そのときに安場さんは学生の前で歌を歌って、「皆さんもついて歌いなさい」と言って歌唱指導までちゃんとやったことがありました。今からふりかえると、本当になつかしい思い出でございます。

私、ごく最近も安場さんに手紙を出しました。亡くなられる10日ほど前かも分かりません。あなたに2つのことをお願いしておきたいと。1つは、『安場保和伝』をはよ完成してもらいたいと、だいぶ日がたったやないかということです。もう1つは、大阪学院大学を次々定年でいい先生が辞めていって、陣容が弱くなりつつあるから、これをひとつあんたが中心になって補充してもらいたいということ。このことを書いて手紙を出したところでございます。4月の初めごろにそんな手紙を出して、大変親しくしていたわけでありまして。早く亡くなられて本当に惜しいことでございまして、心から冥福を祈りたいと、そのように思っております。ありがとうございます。

榊原 胖夫

人見 われわれ弟子の知らない安場先生のお話をいろいろ教えてくださって、ありがとうございます。カラオケに行かれるというのは、僕は全然知りませんでした。

次、榊原先生、お願いできますでしょうか。

榊原 先ほどお話がございましたように、安場君は東大の教養学部のアメリカ科の1期で、アメリカ科にも非常に優れた人たちがたくさんいたんですけれども、私は東大ではないんですけれども、中屋先生、非常に個性の強い方でしたが、親しくさせていただいてました。あるとき、中屋さんが、「榊原君、君は外から見てうちの1期生でだれが一番頭がいいと思う？」と。名前を出すと差し障りがあるかもしれませんが、「私は安場君だと思います」と言いましたら、わが意を得たりとばかり「わしもそう思う」と。「ただ、安場は頭がよすぎて先が見えすぎて、テーマをしょっちゅう変える。次々、次々何かやる。あれがちよっと頭のよすぎる咎である」という話をされたことを思い出しております。

彼はそれからジョンズ・ホプキンスへ行きまして、仲間がたくさんできました。フォーゲルをはじめ非常に親

しくなって、日本に帰ってきてから彼の頭の中には、自分のアメリカでの業績は、60年代初め、すばらしい一連の業績があるわけですが、日本では正しく評価されていないのではないかという考えを持ってたのではないかと思います。ただ、幸いなことに私は彼の業績を正しく評価してくれている1人だと彼は思っていたと思います。安場君も私がした仕事を、それなりに評価してくれていたのではないかと、今、思っております。

だいぶ話をすっ飛ばしますけれども、1994年に私は同志社大学にいたんですけれども、大学にすっかり嫌気がさしまして、研究も大したことできないだろうと思ひまして、定年前に大学を辞めてしまったんです。ある日突然に辞めましたものですから、次の日、女房にそれがわかってカンカンに怒って、「あしたからどうして生活するの」と怒られたんですけれども、しょうがない、僕がそう決めたんだからと。たまたま僕は同時に浄土宗の寺の住職をしていましたので、二股だったんですけれども、これからはもっと立派な住職になろうと思ったんです。ただし、寺のほうは赤字でございましたので、キリスト教主義学園同志社からいただく給料でもって寺をサポートしていたんです（笑）。これは経済学ではクロスサブシデゼーションと呼びます（笑）。

そのことが徐々に知れるようになりまして、3カ月ほどしてから安場君から「いっぺん話をしよう」というので電話があって、君はいかに間違ってるかということを懇々と言われたんです。それで大阪学院大学に来ないかというお誘いを受けました。そのとき、涙が出るぐらいうれしかったんですけれども、しかし、彼の意思に沿わずに別の大学に行ってしまったんです。坊主をし続けるという夢を女房に言われてあきらめてしまって、また大学勤めを始めたんです。その大学は同志社よりもっと腐ってたんですけれども、条件が非常によくて、4年いてくれと。そのうち1年は自由にしていてくれという条件だったものですから、すみません、大阪学院大学を蹴ってそっちへ行っちゃったんですけれども。

安場君は、片山先生から後で聞くと怒っていたようで、「裏切られた」と言っていたらしいですけれども、それにもかかわらず、もちろんずっとその後も親しくさせていただいていたのでございます。

今年の初めでしたか、東京からの帰りに彼が、彼は「のぞみ」に乗ってたんですけれども、私はジパングで「ひかり」に乗っていたので、わざわざ彼は切符を変えて僕の隣に座って、3時間いろいろ長いことしゃべりました。奥様がおられるのに申し訳ない話ですけれども、そのとき、彼の調子ももうすでに悪かったのではないかという気も後でせんではなかったけれども、彼は、「自分は勉強ばかりしてて、本ばかり読んで、人を接待ばかりしてて、そして女房と子どもにはものすごく迷惑をかけた」というのをしみじみと言ひましてね。「今ごろはちゃんと週に1回は女房と一緒に食事をすることに決めてるんだ。君もそうしろ」と（笑）。そういう話ばかりしてたわけじゃないんですけれども、学問の話ももちろんしてたんですけれども、3時間しました。

その少し前から、私、研究会を1つ始めたんです。その研究会は、主に経済学者で、70歳を過ぎてまだ現役で原稿を書いて、あるいは書かなくても書こうという意欲がある人の集まり、研究会。つまり年寄りな研究会がないんですよ。学会等に行っても、名誉会員だと何かかって、会費を払わなくてもええけど、報告するなというような顔をされるでしょう（笑）。ですから、そういう研究会をつくろうということになりまして、東大におられた林周二さんとか甲南におられた高橋哲雄さんとか何人かと語り合いまして、そして当然安場君も入ってもらって、研究会をここ4、5年やっておりますかね。みんなそれぞれ年寄るんですけれども、でも、彼は非常に楽しみにしてくれたように思っております。

その研究会はフランス料理屋でやまして、だれかが交代で研究報告をして、後で食事をして別れるという研究会なんでございますけれども、ご病気になられた後も電話があって、今度の研究会に行かれないかもしれないけれども、できれば行くというような話をされて、奥様から後でお手紙をいただいて、次の研究会にも行くつもりでございましたと書いていただいて、何となく私も、本来のいい坊さんなら、ここで阿弥陀経の一節でも言うべきところなんだろうけれども、胸打たれてシュンとしたことを覚えております。

いろいろ勝手なことを長くしゃべって（拍手）。

岡崎 哲二

人見 榊原先生、本当にありがとうございました。次に岡崎先生、お願いします。

岡崎 ご紹介いただきました岡崎です。偉い先生方がお話しをされた後で、私のような者がしゃべるのはたいへん恥ずかしいのですが、安場先生への感謝の気持ちで、ごく短くお話しをさせていただきたいと思います。

私は、今までお話しになった方々と違って、安場先生とそれほど長いお付き合いをさせていただいたわけではありませんが、私の方では、ずっと以前から一方的に先生のことを存じ上げておりました。私が安場先生を知ったのは、先ほどから名前が出ております、先生の『経済成長論』という本を学部の学生時代に読んだのが最初だと記憶しています。そのころ、私は経済史を勉強しようと思っておりましたが、経済成長論にも関心はありませんでした。しかし、経済成長論と、私が勉強しようとしていた経済史との関係についてはあまり考えておりませんでした。ところが、安場先生の本を読みまして、なるほど、これは経済史の研究にも使えるフレームワークだなと思ったことを覚えております。

その後、学会等で安場先生にお目にかかることはありましたけれども、いわば雲の上の存在という感じで、親しくお話しをさせていただくことはありませんでした。少し密にお付き合いさせていただけるようになったのは、私が1999年に株仲間に関する本を書きまして、それが幸いにも安場先生のお目に止まったことがきっかけだと思います。先ほどの文献目録では89と92の論文になると思いますが、学会誌にわざわざ私の本に関する批判論文を書いていただきまして、また、大阪学院大学のセミナーに呼んでいただいたこともありました。

また、その後私が何度か学会で発表したり、パネルセッションを開いたりしたことがありますが、安場先生にはそれらにいつも出席していただきました。その折りに、さまざまな厳しいコメントをいただいたのも、大変ありがたく覚えております。

これらの思い出を通じて私が感じていることが一つあります。先ほど、日本の学会では生産的な論争がないというお話がありましたが、安場先生は批判をされる時に、私のようなはるかに未熟な研究者に対しても、あくまでも対等の1人の研究者として議論を下さいました。そのことを、私は非常にありがたく感じ、また大変大切なことを教えていただいたと思っております。

学問以外の話では、先ほど株の話が出ましたが、やはり2年前でしたでしょうか、学会の懇親会で先生から株で大もうけしたという話を私も伺いました。私も株式投資に少し関心があるものですから、いろいろお話を伺いたかったのですが、どうやって大もうけしたかという話までは何えなくて大変残念に思っております。また、アイスクリームもごちそうになれなくて、それもまた少し残念です(笑)。

いろいろな意味で安場先生にはもっと教えていただきたいのですが、それができなくなってしまったことを、大変寂しく思っています。どうもありがとうございました(拍手)。

市村 真一

人見 岡崎先生、どうもありがとうございました。最後になりますけれども、市村先生、お願いします。

市村 安場さんが急にお亡くなりになったと知りましたときは、本当にびっくりいたしました。奥様に頼まれて、その翌日、業績目録を参照させていただきながら思い出を弔辞につづりました。もしその弔辞をお読みいただければ、今日のお話はなくてもいいのですが、せっかくの機会でございますので、一、二感想とお弔いの言葉を述べさせていただきます。

安場さんと初めて出会ったのは、1959年に私がジョンズ・ホプキンス大学の客員で教えました時で、そこに大学院生としておられたのが安場さんでございました。しかし実は、安場教授に会います前に、先ほどお話に出ましたフリッツ・マハループ教授とサイモン・クズネツ教授の両方から、「お前は安場という学生を知っているか。彼は非常に注目すべき学生である」と聞いていました。特にサイモン・クズネツ教授からは、「彼が今やっている研究はすばらしい研究だと思う」と聞きました。それが後に人口論と奴隷制をめぐる2つの論文に結実する考察でした。それをやっておられるという話を聞き、そういう素晴らしい日本人学生がいるという期待をもって、安場さん及び結婚まだ間もなかった安場夫人とに会ったわけでございます。当時のジョンズ・ホプキンス大学の経済学部は、フリッツ・マハループ教授、サイモン・クズネツ教授、パールマン教授、エドウィン・ミルス教授—いまノースウエスタンで証券論などを教えています—等々多士済々のすばらしい学部でした。

その学生の中から、先ほどわさの出ましたフォーゲル氏等、何人かすばらしい学者を輩出しました。そのなかで、安場さんは断トツに光った大学院生でありました。

他にも日本人は何人が居ました。今ニューヨーク大学にいる佐藤隆三さんは同級生でしたし、研究員として同志社大学の田口さん、京大の島津さん等も来ておられました。同大学の医学部は優秀でしたから、東大や阪大からお医者さんがたくさん来ておられまして、皆仲良く、一緒に食事などしながら、私ども家族4人も楽しい1年を過ごしたのでございました。そのご縁がきっかけになりまして、安場さんがPh.Dをお取りになると同時に、阪大へお迎えし、そして東南アジア研究センターに来ていただいたわけで、現在まで45年ぐらいのお付き合いということになったわけでございます。

私がしみじみ思いますのは、サイモン・クズネッツ教授という方の安場教授への影響であります。言うまでもなく、クズネッツ教授には数多くの業績がありますが、当時ジョンズ・ホプキンス大学で彼が教えておりましたのは、技術進歩の歴史でございました。その講義には同僚の大学教授が多数座って聴いていました。私も聞いたわけでありまして。その近代技術の進歩の歴史を要約をしながら、いろんな過去の人達の業績をまとめておられたわけです。私の知る限り、ついにその書物は出版されなかった。十数年後にハーバード大学へ移られておったクズネッツ教授を訪ねて、「あの仕事はどうなったのか。われわれはぜひ学びたいんだが」という話をしましたら、2階の書齋へ案内されまして、これが自分のやっている仕事の資料のごく一部なんだと示されました。大きな書棚の2つぐらいがそれで占領されておりました。こういう研究があった、ああいう研究があったと、たくさん技術史の資料を教えられたのを思い出します。けれども、結局、サイモン・クズネッツ教授をもってしても、ついにその研究はまとめられなかったようであります。中村さん、そうじゃないでしょうか。技術史の歴史というのはすごい研究だと思うんですが、私の知る限り、そういうものは残念ながら出ておりません。おそらく膨大なノートが残ってるだろうと思うんですが。

そんなクズネッツ教授の講義を聞かれた安場さんが、ゼミの指導教授として教授を選ばれ、そしてその話の中から多くのヒントを得られて、あのすばらしい業績になったのだらうと思うのであります。その講義の中でクズネッツ教授が言われておったことが、人材教育の重要性でございまして、おそらくそれも安場さんに非常に大きな影響を与えたと思います。終生安場さんが努力されましたアジアの発展とか日本の発展とかの歴史に対する考え方を見ますと、やはりクズネッツさんの影響が一番大きかった。クズネッツという学者の偉大さをしみじみ考えるわけでありまして。ヘンリー・ロソフスキーもその手法でございまして、大川さんもそうでございまして。その人その学に勝れりと申しますか、クズネッツ教授は、おそらく彼の出版されております書物の何冊かよりも、クズネッツ教授の人柄や話が影響を与える、そういう学者であったと思いますし、安場さんもその惜しまれるべき愛弟子の1人であったという感想でございまして。

先ほど原さんがいろんなことをおっしゃっておりました中で、東南アジア研究センターの同僚の批判を安場さんがかなり厳しくやったということですが、その通りでございましてけれども、『Ersatz Capitalism』を書きました吉原教授とか、高谷・矢野教授等の小型家産国家というようなことを巡って、センター内部でも賛否両論が展開されました。あれは両方とも、まだ非常に未熟な発想で、十分吟味しないままで思いつきを語ったものでした。それに対する命名の面白さというか、まとめ上げた語呂のよさで売り込んだようなものです。大したことはないんですが。しかし、私は両方ともかなりくむべきアイデアというものはあったと思うんです。安場君が言うほど悪くはなかったと思っております(笑)。例えば今でもフィリピンとインドネシアは、他のアジア諸国が発展したにもかかわらず、あまり発展しません。1000ドルの壁を超えられない。吉原・高谷・矢野説にも、いろんな意味で経済発展の問題点の一面を鋭くついているのでありまして、安場、高谷、吉原論争を超えて、それらの上に出るようなアイデアを新しい若い人たちが作り上げてくださることを期待したいと思っております。これから、思うことで、安場君の追悼になるかどうかはわかりませんが申し上げたいことがあります。漁師は、魚を生きたまま港へ持って帰るためのいけすにウナギを1匹入れるそうですね。するとウナギが動き回るので、魚はびっくりして必死になって逃げる。そのために魚は死なない。昔、サムエルソンがミルトン・フリードマンを評して、ミルトン・フリードマンというのは、生簀の中のウナギであるとサムエルソンが言ったことがあるそ

うですが、安場君もちょっとそういう側面がありまして（笑）、ウナギと、それからかなり優秀な魚と兼ね備えた学者じゃなかったなと思っております。

皆さん、安場君のためにたくさん集まってくださったことを、先輩として非常にうれしく思います。ありがとうございました（拍手）。

人見 市村先生、どうもありがとうございました。

いろいろ安場先生の思い出を語ってくださった皆様方、どうもありがとうございました。発起人一同を代表してお礼をさせていただきます。

この会、本当は6時半までという予定やったんですけども、もうちょっと延ばしてもいいようなので、7時ぐらいまで皆さん適当に歓談してもらって、それで終わりにしようと思ってます。どうぞもうしばらくごゆっくりなさってください。

2.4 閉会の辞

人見 皆様、今日は多数ご参加いただき、ありがとうございました。まだお話は尽きないとは思いますが、このへんでお開きにさせていただきます。

最後に、大阪大学大学院経済学研究科の宮本又郎先生より一言閉会の言葉をいただきます。

宮本 宮本でございます。発起人の1人として、皆様に最後にお礼を申し上げたいと思います。今日は尾高先生と原先生には、安場先生の研究業績についてのご講話をいただきまして、ありがとうございました。それから多くの先生方に安場先生の思い出について、非常に心温まるお話をいただきまして、本当に感謝しております。

また、私は発起人の1人と申しましたけれども、名ばかりの発起人でありまして、実際には澤田さん、人見さん、瀧井さんのお世話によるものでございますので、この3人の幹事の方にも厚くお礼申し上げたいと思います。

というわけで、私はお礼を申し上げるだけで十分なんですけれども、先ほど山本さんから挑発的な言葉もありましたので、少し私も安場先生の思い出を語ってみたいと思います。

安場先生と最初にお会いしたのは、私が大学院に入った1967年だったと思います。その年の社会経済史学会の近畿部会夏季シンポジウムで先生は、先ほど来よく話の出ています「二重構造と日本資本主義論争」のことをお話しされましたが、私は大学院の1年生だったものですから全然分からなかったもので、安場先生に後から聞きにいて1時間ぐらいみっちり教えて頂いたことを覚えております。それが最初にお会いしたときでした。そのときに、今でも非常に印象に残っているお言葉がありました。「あなたは経済史をやるんですか。日本の経済史家はみんなマルクシストだから、先人の研究は注意して勉強した方がよい」とおっしゃったのです。「全員がマルクスということはないでしょう」と言ったら、「いや、全員そうです」と（笑）。それ以来このお言葉がずっと頭にしみ込んでいまして、私の研究方向も大いに影響されたと思っています。

安場先生の日本資本主義論争に関する論文（『経済発展論における『二重構造』の理論と『日本資本主義論争』』『社会経済史学』34巻1号、1968年4月）は非常にいい論文だと思います。しかし残念ながら日本の経済史学界はまともにこれに立ち向かわなかったのではないかと思います。さきほど今日ご出席の方と話をしていても、あれは「講座派」を批判した論文か、好意的に解釈した論文か、意見は分かれるようですが、当時は、まだ講座派、労農派を自称する人がまだたくさんいたのに、経済史プロパーの研究者はほとんど何も論評を加えなかったのではないのでしょうか。例えば講座派系の代表的論者の1人と考えられる石井寛治先生も、あれについては何もおっしゃってないと思います。安場先生のあの論文は非常にいい論文だと私は思うのですが、経済史学界の取り扱いを礼を尽くしていないように思います。

先ほど尾高先生の話では、安場先生は新古典派ラジカルということでしたが、経済史の世界でも非常に活躍され、重要な仕事を遺されました。しかし、経済史の学界では、安場先生はどちらかといえば客分的な感じで受け止められていたのではないのでしょうか、安場先生が提起された問題や、テーマとされた問題は、いわゆる経済史

や経営史プロパーの研究者ならば思いつかないような問題が多く、新鮮な趣がありました。それだけに一面では経済史の学界では客分的雰囲気があったのですが、その意義が分かる人には分かるというわけで、経済史や経営史学界における安場先生の実在意義は次第に浸透していったといえます。

以上は安場先生の経済史の分野でのお仕事のお話でしたが、こういうまじめな話は私には期待されていないと思いますので（笑）、1つだけエピソードをご紹介しますのであります。

さきほど榊原先生が、安場先生が「研究一筋で家庭のことについては反省している」とおっしゃられたことがあるとご紹介されましたが、そうではないということにつながるかも知れないエピソードです。

それは1986年にスイスのベルンで第9回国際経済史学会があつて出席したときのことで、そのときは速水融先生のオーガナイズで“Pre-conditions to Industrialization in Japan”というテーマのセッションを開きました。参加者は日本からは速水先生と安場先生のほか、西川俊作、杉山伸也、猪木武徳、田代和生、斎藤修さん、外国からはS・ハンレー、A・ワスオー、M・フルーエン、E・パウワー、A・カーランド、G・ローズマン、L・コーネルなどでした。国際経済史学会は会期が1週間ぐらいありまして、日本の学会と違いずいぶんゆったりとしたスケジュールで行われます。間にはエクスカッションや、コンサート、レセプションなどもあります。

ベルンに着いて2日目ぐらいだったでしょうか、安場先生とスイスのルツェルンという美しい町に観光に行きました。猪木さんは一緒でしたし、速水さん、田代さんもおられたと思います。安場先生はスイスに着く前に、「スイスに来た以上は家内のためにオルゴールを、娘のためにはアーミー・ナイフをお土産に買って帰りたい」とおっしゃっていました。アーミー・ナイフ方はベルンですぐに見つかりましたので早速、安場先生は購入されました。一方、オルゴールの方はベルンではなかなか見つからなかったんです。ところが、ルツェルンに行くとオルゴールの専門店があつたんです。多分有名なリュージュのオルゴールだったと思うのですが、素晴らしいオルゴールが沢山おいてありました。

そこでそのオルゴール屋の主人は、「スイスでオルゴールを買うときは15万円から20万円以上のものを買わないとだめである。それならスイスのオルゴール職人手造りのものが手に入る。5万円以下のものは日本の時計会社が機械で造っているものである。決して悪い製品ではないが、本物ではない」とのたまつたのです。その店には、実際15万円以上のオルゴールが沢山ありまして、確かに象嵌は美しいし、音色は素晴らしい。店主の弁にたちまち説得された安場先生は、「じゃ、ここで一つ買って行こう」とおっしゃった。ところが、オルゴール自体も割合大きいですが、こわれものですから、ちゃんと梱包しないとイケない。梱包すると、非常に大きくなりますよね。

このときの計画では、学会が終了したあと鉄道で、オーストリアのザルツブルグ音楽祭に行つて、それから再び南下してベニスとフローレンスに行つて、そこで折り返して再度スイスに戻つて、最終的にはチューリッヒから日本に帰るという計画でした。というわけですから、ここで大きな荷物を背負い込むとちょっと面倒なことになる。下手をすると、私が10日ばかりの旅行期間中、このオルゴールのポーター役を務めなければならないかもしれない。

ということが咄嗟に頭をかすめましたので、私は「安場先生、ここで買うのはやめましょう。スイスにまだあと1週間ぐらいおられますから、こんなオルゴールはどこでも手に入ります」といって、必死に止めました。安場先生は、大変残念なご様子でしたが、買うのをしぶしぶおやめになったんです。

ところがその後、スイスのいろんなところへ参りましたが、くだんのオルゴール店主がというような、高級オルゴールはまったくないわけですね。どこに行つても日本製のオルゴールばかりで。最初のうちは安場先生は、「じゃー、次の町で」とおっしゃっていたのですが、空振りを重ねるようになると、「やっぱり、ルツェルンで買っておくべきだった。君たちの忠告を受け入れたのが失敗だった」とおっしゃる。そして、ジュネーブに行つても、「ルツェルンに戻ろう」とおっしゃる、ザルツブルグに行つて、これからベニスに行く日になつても、ベニスはやめて「ルツェルンに戻ろう」、ベニスからフローレンスに行くときでも「ルツェルンに戻ろう」とおっしゃる。とにかくどこに行つても「ルツェルンに戻ろう」ということになる。ルツェルンに戻つたら、すべての旅行計画が狂いますので、私は「絶対あります、どこかにあります」と言つて、最後まで引きずり回して、安場

先生を所期の予定通り、ともかくチューリッヒまでお連れしたのです。

ザルツブルグから鉄道で中部ヨーロッパを南下する旅では、猪木さんも一緒でしたが、猪木さんはベニスあたりでどこかに消えてしまっていて、チューリッヒでまた落ち合いました。チューリッヒでの出立の日、飛行機の出発時刻は昼頃となっていました。その朝、猪木さんと私は、「今日は朝からチューリッヒのすべての百貨店を回ってでも、安場先生のオルゴールを探そう」と相談し、必死になってオルゴールを探し回りました。

さて、オルゴールは首尾良く見つかったでしょうか？皆さんはどう想像されますか？

先日、安場先生が亡くなられたあと、猪木さんとこのことについて、話をする機会がありました。話は2人でほぼ一致しましたが、私が「そして最後にオルゴールを見つけたよね」と言ったところ、猪木さんは「いやいや見つからなかったはずだ」と言うんですね。猪木さんか、私か、どちらが正しいと思われますか。

そこで先ほど奥様に確かめました。確かめましたら、「スイス土産のオルゴールはあります」ということです。やっぱり私のほうが記憶力が上のわけで歴史家としては優れているということが証明されたわけですね。(笑)。

いやいや、この話は私の記憶力が優れているということを言い立てるためにしたわけではありません。安場先生が奥様へのお土産を確保するためにこのように異常な執着を示されたことは、安場先生が決して仕事一筋の方だったのではなく、凄く奥様思いのお方であったことを物語っているのではないかと、そのことを皆様にお伝えしたかったのです。

皆様のお話にもありましたように、安場先生は非常に広い学問分野をカバーされました。これからの研究者は誰も安場先生のまねはできないと思います。私どもが安場先生と主として接触する場であった数量経済史研究会では安場先生は、理論経済学や計量経済学の研究者と経済史研究者の間の橋渡しを本当にうまくやって下さいました。岩波書店刊行の『日本経済史』全8巻はまさに、この安場先生のご指導の賜とってよいと思います。安場先生のお仕事の全部を、後進の研究者が1人で継承するのは無理であろうと思います。しかしながら、今日ここに集われました方々の間で、分担しながら継承して行くことは可能であると思います。私は、せめて安場先生の数量経済史の分野だけでもしっかりと継承してまいりたいと思っています。皆様には、東南アジア研究の部門であるとか、経済発展の部門であるとか、それぞれの分野で、安場先生の学統を受け継がれていかれることをお願いして、閉会のご挨拶といたします。

人見 皆様、長時間ありがとうございました。これで安場先生を偲ぶ会を終わりたいと思います。今日お話ししていただいた方に、最後に拍手したいと思います。お願いします (拍手)。

3. 関連資料

資料1：海外からのメッセージ

① Richard A. Easterlin

I owe to Professor Yasuba one of my most memorable experiences. He arranged a visit to Japan for my family and me that gave us the opportunity to see and visit some of your beautiful places. Most of all I remember the graciousness and courtesy with which Professor Yasuba and his wife welcomed us to Kyoto and their home. It was such a privilege to get to know this warm and dedicated man in person. He was a fine scholar, and a wonderful human being, and we shall miss him very much.

Sincerely,

Richard A. Easterlin

② Robert W. Fogel

My wife and I were terribly saddened to learn of the death of Yasukichi Yasuba, whom I have known for half a century.

We met when we were both graduate students in the Department of Economics at Johns Hopkins University. He was a brilliant student, a fact that was recognized by both his teachers and his fellow students. During his graduate student career, he wrote a paper that thrust him into the center of the debate on the economics of slavery and that turned out to be a seminal contribution to the ultimate resolution of the issue. His doctoral dissertation, "Economics of the Birth-Rates of the White Population, United States, 1800-1860," was a major contribution to the study of the economics and demography of economic growth in the United States during the first half of the nineteenth century. Its findings are still cited.

Professor Yasuba was a leading figure in the analysis of economic growth in Southeast Asia well before the "economic miracle" became as widely recognized as it is today.

I kept in close touch with Professor Yasuba over the years. My wife and I had the good fortune to spend six weeks enjoying the company of Professor and Mrs. Sachiko Yasuba, living in their condominium in the Nagaokakyo and lecturing at Osaka Gakuin University during June and July 1996. During that visit, I spent several hours on most days talking with him about issues on the political economy of Asia and the United States.

Our graduate students here at the Center for Population Economics at the University of Chicago have had the good fortune to participate in several recent seminars led by Professor Yasuba. Both through his writings, and his visits to the United States, Professor Yasuba remained a major contributor to the thoughts of economic historians in our country.

Sincerely yours,

Robert W. Fogel

③ Peter Mathias

Professor Yasukichi Yasuba

I knew Yasukichi Yasuba as an 'economist's economic historian' and economist who had established an important link between Japanese and American expertise and methodologies in modern economic history and in present-day economic analysis underlying economic policy. He was not so well known in the United Kingdom as in the United States where, after post-graduate education, he kept many academic links (particularly with Johns Hopkins University) which drew him regularly from Japan.

I had not known him personally at Osaka University or at Osaka-Gakuin until, through his initiative, I was invited to spend three months as a Distinguished Visiting Professor at Osaka-Gakuin in 1998. He masterminded the visiting professorship program in economic history which brought a sequence of leading international scholars to the university. For all of them he produced a wide-ranging programme: public lectures for students and faculty as a whole, faculty and graduate student seminars, local and regional gatherings of economists and economic historians in Kansai. This put Osaka-Gakuin at the centre of a 'magnetic field' for the subject and greatly enhanced the prestige of the university.

I knew Yasukichi Yasuba also as an acute commentator on Japanese and world economic policies, a shrewd observer of the economy with penetrating insights and presentations, following his data and analyses to the relevant conclusions for policy without fear or favour. For many years, even if interrupted by illness, he was an influential columnist in the financial press. He became afflicted by periodic bouts of depression (with offsetting intellectual ebullience) which slowed, but never halted, his academic output. I remember that he put much faith in a particular piece of electrical apparatus, which he commended to his friends and colleagues as an unflinching answer to their own problems.

Holding the visiting chair from May to July 1998 brought me to Osaka-Gakuin for the first time, and for a sustained stay,

which meant more than other short academic visits. Yasukichi went out of his way to befriend (and instruct) his visitor while he and Sachito made my wife and myself warmly welcome in Nagaokakyo. Keeping house and experiencing the changing seasons brought us closer to Japan. We saw the paddy outside the apartment flooded and planted. As the nights passed we heard the chorus of the frogs and saw the daily visitations of the egrets. We left just before the harvest, leaving behind an enriching experience and an enduring appreciation of Yasukichi Yasuba.

Peter Mathias

Downing College, Cambridge

Distinguished Visiting Professor, Osaka-Gakuin University 1998

④ R. Marvin McInnis

On this occasion I am very pleased to offer a personal reminiscence of Yasukichi Yasuba. While I had been acquainted with him for many years, it was only in the last year of his life that I got to know him well.

A turn of events meant that I just missed getting to know him much earlier. Yasukichi made his doctoral studies at the Johns Hopkins University, under the guidance of Nobel prize winner Simon Kuznets. I too intended to go to Hopkins to study with Kuznets. However, I received a letter from Kuznets advising me that he was going to move to Harvard. So I ended up going to the University of Pennsylvania to study with Richard Easterlin, a disciple of Kuznets. Through Easterlin I gained an interest in historical demography.

I was asked to review a book on American fertility decline, the published doctoral thesis of Yasukichi Yasuba. I did so, and wrote quite favourably about it. At about the same time I became aware of Yasuba's justly famous article on American negro slavery.

It was many years later, however, that I first met Yasukichi in person. He had begun to attend annual meetings of the Economic History Association in the United States. We found that we had much in common to talk about. We corresponded and exchanged drafts of papers on which we were working. Yasukichi was a tough and cogent critic. He would argue his position persuasively.

I was especially pleased, a little over a year ago, to receive an invitation from Yasukichi to be a visiting lecturer at Osaka Gakuin University. It was a great honour to me to be added to the illustrious list of economic historians who had visited at OGU. I had only once before visited Japan, and then only briefly. Many aspects of Japanese life and culture fascinated me and I was provided with an opportunity to explore them more thoroughly.

My visit was also an opportunity to get to know Yasukichi more closely. I lived in the same apartment building, often took the same train to campus, and we took lunch together two or three days a week. Our talks ranged over many things: family history, Yasukichi's experiences as a graduate student in the United States, culture, music, traditions, food and drink, and of course, the features of historical economic development. For me it was all thoroughly enjoyable and enlightening as well. Yasukichi explained to me the ins and outs of university procedures, and he extemporaneously gave oral translations of my lectures.

After two months in Australia, doing research and giving visiting lectures, I returned to Japan for a few days at the beginning of April. I expected to meet again with Yasukichi but when I met with Sachiko, his wife, I learned with great sorrow that

Yasukichi was ill in hospital. I returned home to Canada and just a few days later was notified that Yasukichi had died the previous day – on my birthday.

Yasukichi Yasuba was a splendid scholar and a fine man. It was my great pleasure to have come to know him and my great sadness to know that he is no longer with us.

Yours most sincerely,

R. Marvin McInnis

Professor Emeritus of Economics

Queen's University, Canada

⑤ Gustav Ranis

I was shocked to learn of the death of Professor Yasuba. He and his wife visited us here at Yale only recently earlier this year, and he seemed in excellent shape, both physically and psychologically.

Professor Yasuba was one of the most innovative Japanese development economists, never willing to accept the conventional wisdom and always eager to challenge it. He was, I know, one of Simon Kuznets' favorite students, and I very much appreciated his wise counsel on the Ohkawa/Ranis Comparative Analysis project, focusing on the relevance of the Japanese historical development experience to the Third World. Professor Yasuba could always be counted on to come up with a new idea or a new look at an old one. His restless, searching mind will be very much missed. He never stopped thinking, working and publishing.

The same intellectual unpredictability and restlessness also characterized Professor Yasuba's private personality. He was kind enough to invite me and my wife to spend much of one summer at Osaka Gakuin University. While he was not well much of that time, he and Mrs. Yasuba provided generous hospitality to both of us. Indeed, in all my personal dealings with Professor Yasuba over the years, I have always found him helpful and considerate, eager to share his ideas, not given to small talk, but earnest and committed. I have lost a good friend as well as an esteemed colleague.

Gustav Ranis

Frank Altschul Professor of International Economics

⑥ Nathan Rosenberg

Professor Yasukichi Yasuba

In memoriam

I was very saddened to learn of Professor Yasuba's untimely death. Although I came to know him personally only four years ago, I had long held him in the highest esteem for his seminal contributions to the history of American demography in the first sixty years of the nineteenth century. I confess that I also find it more than a little intriguing that, half a century or so later, American academics should continue to cite a Japanese scholar for an authoritative treatment of the changing determinants of American fertility as the country's population center continued its western movement. I cannot honestly say that I ever came to fully understand what forces drove him into the research project that eventually became his doctoral dissertation at Johns Hopkins University, but I can assure you that American scholarship continues to cite his work as a major milestone in our country's demographic history.

In the year 2001 I was very fortunate to have been invited by Professor Yasuba to come to Osaka Gakuin University as a visiting professor. Although this was not my first visit to Japan, it was the first time my wife and I had the opportunity to run a Japanese household. We lived in a flat in Nagaokakyo, where none of our neighbors spoke English, nor did any of the assistants in the local supermarket, banks or small shops. This left us, at least in the beginning, totally dependent on Yasuba-san and his wife for help and guidance. We quickly realized that we were in very good hands. Their many kindnesses, hospitality and friendship were unique and heart-warming. Yasuba-san, for example, taught us how to distinguish between local and express trains, something which, I can assure you, is not simple or straightforward for someone who reads no Japanese.

Yasuba-san was extraordinarily patient and attentive in dealing with the inevitable tedium that is involved in integrating two "illiterate" Americans into the life of the Nagaokakyo community. He found time to take us to the police station to register as foreigners, took us to the local bank, showed us where the best places to shop were, where to eat out, to find good French wine, and to cope with the household gadgets which had only Japanese instructions. As busy as he obviously was, Yasuba-san found time to take us to the famous cherry dances in Kyoto's Gion district, to the Kawashima textile factory and museum. Knowing my interest in the development of scientific instruments, he took us to the Shimazu Museum. He treated us to a wonderful meal where the Nobel Prize winner Yasunari Kawabata used to love to dine, and Yasuba-san insisted that I try the sashimi prepared by the third generation chef that has emerged from the family that owned the restaurant. As was invariably the case, Yasuba-san had provided excellent advice.

On hearing that my wife enjoyed visiting Zen Buddhist temples, Yasuba-san made sure to take us to Nanzenji and afterwards treated us to a sumptuous tofu meal (our first). He then took us to the Canal Museum after hearing of my interest in such civil engineering projects. As we toured the museum and looked down upon the fast-flowing water below, he discreetly whispered to us that his grandfather had been the governor of the prefecture when the canal was built.

Yasuba-san loved Azaleas and made certain that we visited the park in Nagaokakyo when they were in their full blossom, a truly glorious sight. He was constantly thinking of ways to make our stay even more memorable as well as more comfortable, and he certainly succeeded! One of the afternoons I recall and treasure most was a visit to a friend of his. She lives in a 150 year old house which has been preserved in its original state. She showed us around the 12 small rooms covered by tatamis, decorated with original scrolls, and with utensils used more than a hundred years ago. In the rear of the property was a magnificent, idyllic garden—a perfect oasis, quiet and serene, in the middle of downtown, bustling Kyoto. It was a wonderful treat!

When I first arrived in Nagaokakyo, I regarded Yasuba-san as a distinguished colleague. When I left, two months later, I also thought of him as a dear friend. I regret that I will never have the opportunity to reciprocate his hospitality.

I will treasure his memory.

Nathan Rosenberg
Professor of Economics (Emeritus)
Stanford University

⑦ Peter Temin
〈*The First Letter*〉

Professor Yasuba was one the first new economic historians, and the results of his demographic research in the American South continue to be cited today. They have stood the test of time. In addition, Yasuba returned to this topic recently and brought his work up to date. He also contributed greatly to more current topics, including his ever-present optimism about the Japanese economy.

He ran a very successful program of visiting economic historians for many years. I enjoyed my time at Osaka Gakuin University in 1999, and I know that many of my friends who visited Yasuba did too. He facilitated both the communication between me and his colleagues—who were uniformly generous and welcoming to an American visitor—and my communication with faculties at other Japanese universities. I gave many talks and met many Japanese economists as a result of Professor Yasuba’s kind invitation.

I remember Yasuba with great fondness and now sadness at his death.

Peter Temin

〈*The Second Letter*〉

Dear Mrs. Yasuba,

I write to extend condolences on the death of Yasukichi on behalf of me and my wife, Charlotte. He was a fine scholar and a good friend. We will all miss him, although none so much as you.

I recall with great fondness the months I spent visiting at Osaka Gakuin University at Yasukichi’s invitation. I had a marvelous time, and Charlotte and the girls had a lovely visit as well. It is one of our good family memories. We enjoyed visiting you in your apartment, walking around Nagaokakyo, and particularly going to the supermarket. My girls still like to remember the way “milk” is pronounced in Japanese.

It was good to see you both at the Economic History meeting in Nashville, and we were looking forward to seeing you again next year. It is very sad that Yasukichi’s death has cut short those plans.

Yours truly,
Peter Temin

⑧ Jeffrey G. Williamson

A Short Memorial for Yasukichi Yasuba

by

Jeffrey G. Williamson

Laird Bell Professor of Economics

Harvard University

July 5, 2005

Economic historians, and other friends of Yasukichi Yasuba living abroad, were greatly saddened to learn of his passing on April 13, 2005.

Not only did Yasukichi enrich my understanding of Asian development and American demography, he also became a good friend. I remember quite vividly, and with immense pleasure, the stay I had at Osaka Gakuin University for three months May–July 1994 as a Visiting Distinguished Professor. Yasukichi was a wonderful host and a stimulating colleague during that visit, and our long–distance correspondence was frequent thereafter. Some of that correspondence dealt with his successful efforts to get translated and published in Japanese my book, *Inequality, Poverty, and History: The Kuznets Memorial Lectures* (Asano Agency: Tokyo), and for that I will always be grateful.

Perhaps his friends and colleagues in Japan are unaware of Yasukichi’s early career, since it focused on North America and it was published in English. *Birth Rates of the White Population of the United States* (Baltimore: John Hopkins Press 1962) was based on his thesis and it became a seminal work. Indeed, the recent *A Population History of North America*, by Michael Haines and Richard Steckel (Cambridge: Cambridge University Press 2000), was able to state that Yasukichi’s estimates of US white crude birth rates 1760–1810 are still the best available (pp. 157 and 324). I only hope that my work is so favorably appreciated 40 years from now! Furthermore, in the famous *Reinterpretation of American Economic History* (New York: Harper and Row 1971), who did editors Robert Fogel (now Nobel Laureate) and Stanley Engerman ask to review the state of the slavery debate? The answer, of course, is Yasukichi who produced the oft–cited “The Profitability and Viability of Plantation Slavery in the United States.” But as he matured, Yasukichi’s interests ranged far beyond American slavery and demography. For example, his writings on the 19th century revolution in Asian transport and the role of natural resources in Japan’s pre–WWII trade are frequently cited in the recent globalization literature (see his papers in *Explorations in Economic History*, 56: 1978, and the premier *Journal of Economic History*, 106: 1996). His work on Japan and Southeast Asia will be much better known to the audience at your July 29 gathering, so I will make no effort to review it here.

Yasukichi Yasuba was a great scholar, a first rate social scientist and a wonderful human being. He was well known to the international academic community, and we will miss him very much.

⑨ Pan A. Yotopoulos

IN REMEMBRANCE OF: Yasukichi Yasuba, 1930–2005

Yasuba–sensei has served as a model for achievement in many a life, and non least mine. A foreign student in the United States who turned (almost contemporaneously) his Ph. D dissertation into a book at his Alma Mater, Johns Hopkins University nonetheless, came easily into the radar screen of many aspiring academics – and this is how he earned my admiration, and my envy, in the early 1960s. I had the privilege of meeting him a decade later and sharing many strands in our lives since then. Mostly it was in short trips, in professional meetings, in correspondence and in comments one on the other’s work, and in the late 1980’s as colleagues for a year when I was a visiting scholar at Kyoto University.

Professor Yasuba’s professional work enriched and enlivened many of us. It enriched us, especially, because it was always founded on the historical record, whether it referred to slavery and development or to natality rates and growth in the U.S. in the early 19th century; to the lessons of the Tokugawa legacy for contemporary Japan; or to the evolution of the dualistic wage structure. These historical insights were as important in the second half of the 20th century, as they are today when economists and politicians forget them at their own peril – and at the peril of the rest of us also.

Some of us may have missed tidbits in the messages of Yasuba–sensei that enlivened our lives. But they remain vivid in my mind. When he invited me to give a seminar in Kyoto on “What has development economics learned from recent experience?” he (purposefully?) transformed the “recent” to “future experience” and remarked that he thought it was too

early to tell until he realized “... that the Greeks have the magic power to read the crystal ball!” Referring to a common friend who had been pushing mathematical modeling to some considerable extremes, he engaged me to some correspondence to enlighten him whether this was an exercise in “playometrics” or more properly in “paegniometrics” from the proper Greek root for the word “play.” His co-authored article with Martin Bronfenbrenner, another inimitable practical joker, is transposing to Japan the words of the Greek Prime Minister of the 1960s, George Papandreou, that “the figures are prospering while the people suffer.” The article uses the sentence to introduce the chasm that may exist between economic accounting and welfare in the period when Japan was being described as a “welfare superpower” inhabited by “workaholics living in rabbit hatches.”

Yasuba-sensei’s sense of humor, self-deprecating and otherwise, enlivened and impressed his friends and his audiences, and especially so those of us who knew that he had been living for long years in deep depression.

Yasuba-sensei will always be remembered as a Gentleman and a Scholar who profoundly touched and enriched many lives.

Pan A. Yotopoulos

Professor Emeritus, Stanford University

Distinguished Professor, Department of Agricultural and Resource Economics, University of Florence, Italy

資料2：安場保吉葬儀における弔辞

① 市村真一

弔辞

安場さん、昨晩は驚きました。昨年末京都で、先月大阪でお目にかかったばかりでしたのに、まさか貴方とこんなに早く幽明境を異にしようとは、思ってもいませんでした。奥様から近状をすこしお聞きしましたが、とても信じられませんでした。思えば、貴方と貴方のご家族とは長いおつきあいでした。1959年春、ジョンズ・ホプキンス大学で初めて米国での教鞭をとった私が、そこで出会った最初の日本人院生が貴方でした。新婚間もなかったあなた方に最初のお子さんがお生まれになった前後のことなど、懐かしく思い出されます。爾来46年、大阪大学・京都大学では同僚として、今に及ぶ学者人生を共にしました。

学者としての貴方について、何よりも想起しますのは、ジョンズ・ホプキンス大学で貴方を指導したサイモン・クズネッツ教授が、貴方の勉学ぶりや研究を絶讃されていたことでもあります。果せるかな、貴方が間もなく1961年に提出された博士論文は、後に『米国の白人人口の出生率：1800～1860』Johns Hopkins U. Press, 1962及び“米国における植民地奴隷制の利潤と生育力 (The Profitability and Viability of Plantation Slavery in the United States),” *The Economic Studies Quarterly*, Sept. 1961として公刊され、アメリカの学界をうならせました。その事は、前者に追隨したForster-Tuckerの『経済機会とアメリカ白人人口の繁殖率：1800～1880』Yale U. Press, 1972が十年後に出版され、後者が、ノーベル賞を貰ったFogelとEngerman共編の『米国経済史の再解釈』Harper, 1971に収録された事が、証明しています。実は、Fogel教授はジョンズ・ホプキンス大学で貴方の同級生でした。彼がノーベル賞を貰った理由の一端は、安場の奴隷制の研究から始まったとは、フォーゲル教授自身が、後にクズネッツ教授の伝記を書くために大阪を訪れた時、私に語ったことでした。

博士号を得たばかりの若き俊秀の貴方を阪大に迎えようとの私の提案に阪大の先輩方は直ちに賛成、熊谷教授の下の助教授として貴方は、実に八面六臂の活躍をされました。経済政策・経済史の新しいタイプの研究を次から次へと発表され、阪大時代9年間だけで、少なくとも編著訳書など4冊、論文は10を下りませんでした。その間に、少なくとも貴方の関心の一部は経済発展論に向っていきました。奥様と共にギルの『経済発展論』を訳され、また「経済発展論における二重構造の理論と日本資本主義論争」『社会経済史学』34巻1号、1968等々であ

ります。思えば、政策論と経済史の接点に経済発展論が位置したのは当然でした。

1968年、私自身が京都大学東南アジア研究センター（現研究所）に転じた時、貴方のこの新関心にアジア発展の解明を期待して貴方を新研究所の経済部門の教授に迎え、若き吉原・江崎の両助教授と共に国際級のアジア発展論研究の推進を期したのでした。貴方は、阪大時代の政策論の仕事を徐々に整理しつつ、東南アジア経済発展の研究に目を向け、チュラロンコン大学に教鞭を取るなどしながら、その研究を推進、11年間の京大時代に、驚くなかれ、貴方の編著は8冊、論文は30を越えました。その中には、貝塚啓明教授との共編による経済政策分野の優れた論文集6冊が含まれています。そして阪大に復帰直前にまとめられた『経済成長論』筑摩書房、1980がサントリー賞を受けたことは、貴方の京大時代のフィナーレを飾るにふさわしいものでした。恐らくこの時期が貴方にとって最も多産な時期ではなかったでしょうか。だが、人並はずれた才能に恵まれていた貴方にとっても、政策論・経済史・アジア発展論と3足のわらじをはき続けることは非常に無理なことでした。その過重な負担に、貴方の肉体は徐々にむしばまれていったのかもしれない。

1980年阪大に復帰された貴方は、時折健康の不調を訴えられつつも、そのハイペースの論著の生産力を維持し続けられました。その姿は、そばで見ていて痛々しいほどでした。阪大定年退官までの14年間、編著合わせて6冊、論文は22編以上であります。なかでもアメリカの学者と共同で編集された『日本の政治経済学』Stanford U. Press, 1987は有名ですが、そこに貴方のアメリカでの最初の恩師であるブロンエンブレナー教授と共著で「経済福祉」を寄稿されていることは、貴方の暖かい人柄の一面を知る思いがいたします。また日本の発展への海運の貢献をめぐる論文も注目を引きまします。こうした発展論の忘れられがちな側面への貴方の着眼は、若き日と変わらぬ非凡さのひらめきであります。

阪大退官後、大阪学院大学において、大学院の創設運営に努力されつつ、なお継続された研究も忘れられぬものであります。この9年間は、私の北九州勤務と重なり、親しく接する機会は減りましたが、貴方が努力されていた外国の学者の招聘計画のいくつかに招待され、それに参加して、貴方の健在ぶりを喜んでいました。学問研究でもいよいよ生産的で、貴方の単著『東南アジア経済発展論』ミネルヴァ書房、2002や最近の編著『東南アジア社会経済発展論』勁草書房、2005は、私の机辺にあります。最後まで奮闘努力にただ低頭するばかりであります。

安場さん、貴方は東京に生まれられました。元は熊本藩、幕末は美濃の某藩の重職の由緒ある家の出身でありました。人にはおっしゃいませんでしたが、ひそかにそれを誇りにしておられました。頂いた明治の元勳の一人であられた曾祖父様の写真のコピーを私は今も大事にしています。旧制広島高校の最後の頃の卒業生であり、東大を出て直ちに国際基督教大の助手とされました。その時に、米留学をされたのでした。ウィシコンシン大学で、奥様と結婚され、お二人仲良く勉強されていたボルティモア時代を知るものとして、いまの奥様の悲しみを慰めるすべもありません。安場さん、貴方は普通の人以上に奥様に負うところがあります。貴方が夜なべして書いた論文を、翌朝の提出に間に合うようタイプしたのは奥様でした。才能豊かな奥様のご助力あってこそこの貴方の業績だと、家内と共に感じ入りながら拝見していました。そういう奥様やご家族に対し、安場さんもさぞかしもう少し長生きして、ご恩返しをなさりたかっただろうと拝察しますが、今となっては残念でなりません。

しかし貴方もよくやりました。健康をむしばまれながら、気分の波に苦しみながら、よくこれだけの論著を生産しました。本当に、感心します。どうか、彼岸の地よりご家族をお守り下さい。

平成17年4月15日

友人、京都大学名誉教授 市村真一

② Richard Smethurst

Mae and I first met Yasukichi in Baltimore in 1958, when he studied at Johns Hopkins University with Simon Kuznets, the Nobel Prize winner. During that time, we became close friends with Yasukichi, Sachiko, and in 1959, a baby named

Junko. Thanks to Yasukichi, we moved into the Yasuba house in Sendagaya in 1961, and lived with his parents and brothers and sisters for a year. It was from this beginning that our long and close relationship with the Yasuba family began. Today we consider Sachiko, Jun, Yuko, and all of the other Yasubas to be among our closest friends. We shall miss Yasukichi, as we miss Mihoko, Yasuji, and Sayoko.

Yasukichi was a mentor as well as a friend. He and I had dozens of conversations over the years from 1958 until 2004—almost always, because Yasukichi was serious, about serious matters. I can truthfully say that I, an economic historian with no formal training in economics, learned more about economic history from Yasukichi than from any other teacher. I owe him a great deal, and want to take this occasion to thank him.

Yasukichi and Sachiko visited us in Pittsburgh several times, and in the 1980s, he spent a term at the University of Pittsburgh as our Mitsubishi Visiting Professor of Economics. Yasukichi taught a course in Japanese economic history, and I still have and use the notes I took during his lectures. Here he was my teacher. Most recently, in 2003 and 2004 he came to the United States and delivered multiple lectures to our faculty and students.

I should also mention some of his various important books: *Keizai seichoronon*, published in 1980, won the Suntory Prize. *Keizai seichoron* co-edited with Inoki Takenori, is part of the 8 volume *Nihon keizaishi* series published by Iwanami shoten. This is the seminal work on Japanese economic history. *Tonan ajia no keizai hatten*, published in 2002, sums up Yasukichi thinking on the economic development of Thailand and its neighbors. And in English, *Birth Rates of the White Population in the United States, 1800–1860*, published by the Johns Hopkins Press in 1961, is an important work of American economic history. These are only a few examples of Yasukichi's valuable writings on economic history.

Mae and I are honored to have had Yasukichi as a friend. He began what to us seems a unique and important trans-national relationship the connection between the Yasubas and the Smethursts. We send you our condolences. At the same time, we look forward to meeting Sachiko, Jun, Yuko, and the rest of you soon so we can talk about Yasukichi and also continue our own deeply cherished friendships.

(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科助教授)

(東京大学大学院経済学研究科助教授)

(大阪大学大学院国際公共政策研究科助教授)

(大阪大学大学院経済学研究科教授)